

もういちど7歳の目で世界を…

熱中小学校10周年記念誌

未来を自分色に…

NECCHU
熱中小学校

contents

01 ごあいさつ　堀田　一芙
02 ごあいさつ　佐藤　廣志
03 各地での展開
04 熱中小学校 一覧表
05 コアバリューはボランティアの先生
06-07 先生のみなさま
08-13 10周年記念レポート
14-49 在校生からの寄稿
- 14-17 高畠
- 18-19 高岡
- 20-24 十勝
- 25-27 とくしま上板
- 28-29 こばやし
- 30-32 くちくまの
- 33-35 琴浦
- 36 萩
- 37 銚子
- 38-39 白老
- 40-42 丸森
- 43-45 ひとよしくま
- 46 かつらぎ
- 47 みやぎ美里
- 48 シアトル
- 49 食の熱中小学校

50-53 のと・おん
54-55 あゆみ
56 あとがき

学びを大切にする人と地域が繁栄する

一般社団法人熱中学園代表理事　堀田 一芙



2025 年 9 月熱中小学校プロジェクト開始 10 年目に、Japan Times 社主催の「 Sustainable Japan Award 2025」Satoyama 部門の審査員特別賞をいただけたのは、大変ありがたい思いです。これも、地方の事務局、先生方、生徒の皆様のおかげであり、関係者全員が受賞させていただいたと思っています。

熱中小学校の取り組みは、11 年前に山形県在住の友人、佐藤廣志さんを通じて山形県高畠町から小学校の廃校を再生してほしいと頼まれたことがきっかけでした。大人の学びの学校として再開校しようと決めました。その学校が以前、水谷豊主演のドラマ「熱中時代」の撮影場所だったことがわかって「熱中小学校」と名を付けました。熱中小学校の特徴は、地域に関わる人達が自主独立の精神で運営する大人の学び舎であること。「もういちど 7 歳の目で世界を…」が合言葉で、国内 15 校、海外 1 校（米国シアトル）に 1000 人以上の生徒が約 350 人のボランティアの先生の授業を毎月受けています。7 歳の目、つまり好奇心旺盛な時の気持ちに立ち返り地方での生き方を考えようという理念は最初から今まで一貫しています。

学校は月 1 回の授業を 6 回、半年を 1 期として授業料は 1 万円前後です。20 代から 90 代までの人達が多様な年齢、職業の仲間と学び、また遊んでいます。

この学校の最初の特徴ですが、ボランティアの先生をシェアするしくみです。各界の先生には講師料はなく、交通費と宿泊費のみで参加いただいています。教室の熱量を感じていただき、忙しいけど楽しいからまた次も、となっていただければ学校が継続されるしくみです。2 番目の特徴は、セミナーのように 1 回毎に集まっているわけでなく、クラスメートがいるのが学校です。自分自身のことはわからないけれども、多様な人達の中で、自分にはこんな良いところがある、という自己肯定の形が出てきます。年齢、職業が違う多様な人々の集団であれば自己発見の度合いは深まります。

３番目の特徴は、地元を愛して地元のために何か始めるという生徒さんが出てきます。例えば高畠では、ずいぶん前から耕作破棄地を耕して、みんなでぶどうを作って、地元の高畠ワイナリーさんのご協力を得て、毎年「熱中ワイン」を販売しています。

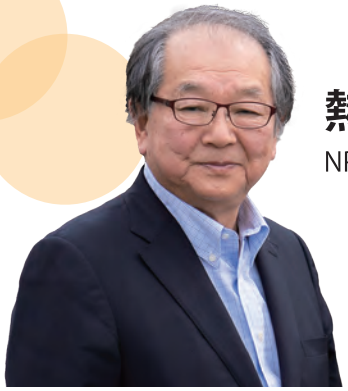
たくさんの生徒さんの新しい発想を得てこれまでと違う活動をしていると、その学校は地元からやがて理解を得て持続可能性が増して来ました。

一方、首都圏で 2 年前に開校した「食の熱中小学校」はこれまでの熱中小学校とは違う、東京で生き残って、世界で通用する学校を目指し、「食のツアー」を通じて地方と交流します。

我が国は東京一極集中になって久しく、首都圏の消費者が地方の生産者を訪ねるツアーつきの学校です。食好きの生徒さん達約 90 人が毎月、座学と「こんな旅はなかった」という体験をしています。地方に移住はできないが、その土地を気にする'関係人口'となる試みです。

これからも「学びを大切にする人と地域が繁栄する」という信念を追いかけてまいります。





熱中小学校10周年記念冊子に寄せて

NPO 法人はじまりの学校理事長　佐藤 廣志

熱中小学校プロジェクトはもともと「時沢小学校」という高畠町の廃校再生プロジェクトとして始まりました。時沢小学校は、地域の寺子屋として始まった所から 100 年以上の歴史があったそうですが、2010 年 3 月、その長い歴史に幕を閉じました。

それから 4 年後、2014 年の年末ですが、当時高畠町でも中学校の統廃合の話も持ち上がっており、廃校再生については喫緊の課題という事で、私の方にもお話をいただきました。雪に覆われた時沢小学校に私と当時震災の復興などの取り組みを行っていた堀田さんと当時の高畠町企画課長の齋藤さんで、「この場所でまずは何かやってみようか」と話したのが、私たちの最初の“はじまり”でした。

それから翌年の 2015 年 10 月 3 日。多くの仲間の知恵と情熱が集まり、この場所は「熱中小学校」として再び息を吹き返しました。「もういちど 7 歳の目で世界を…」という合言葉のもとに、使わなくなった学校施設を大人たちがもういちど学び集う場として活用するというかなりチャレンジングな取り組みでした。

当初想定した高畠校の募集定員は 40 名でしたが、蓋を開けてみれば、なんと 84 名の入学希望をいただきました。それほど多くの方が、「もういちど、7 歳の気持ちで学びたい」、「なにか社会のためになる事をしたい」と思ってくださったのかなと想像します。最初は 3 年での卒業を見込んでいましたが、皆様からの熱い想いや更なる展開の期待から生涯学び続ける場として取り組みを継続してきました。

これまでの 10 年間で、学び舎に集った生徒は延べ 700 名を超えました。また研究者、経営者、アーティスト、農家の方など、延べ 300 名以上の多様な講師にご登壇いただきました。2015 年開校時より始めた 8 室のオフィススペースは 2019 年以降ずっと満室で利用いただいています。

2016 年に始動した耕作放棄地再生プロジェクトもまた、その象徴の一つです。荒れた土地に再び人の手が入り、ぶどうが実り、2022 年には「熱中ワイン」として形になりました。

2017 年から始まった鉄道レイアウトづくりは、2022 年に開通式を迎え、引き続き学校のシンボル的な展示となっています。

さてこのように、様々な活動を行ってきましたが、改めて活動の目的は、廃校再生と地域で活躍するプレイヤーの育成という所から始まっています。各地の熱中小学校教室で生徒として学び、時には先生として語り、そこから新たな一歩を踏み出された方がたくさんいらっしゃいます。ご講演いただいた先生方の益々のご活躍、生徒のみなさまの新しい挑戦、こうしたお話が聞ける事が熱中小学校の一番の成果だろうと考えています。

この度 10 周年という節目を迎えましたがこれからも各地の熱中小学校プロジェクトを通じて新しいプレイヤーや物語が生まれてくる事を楽しみに全国の取り組みの益々の発展を期待しております。



熱中小学校 各地での展開

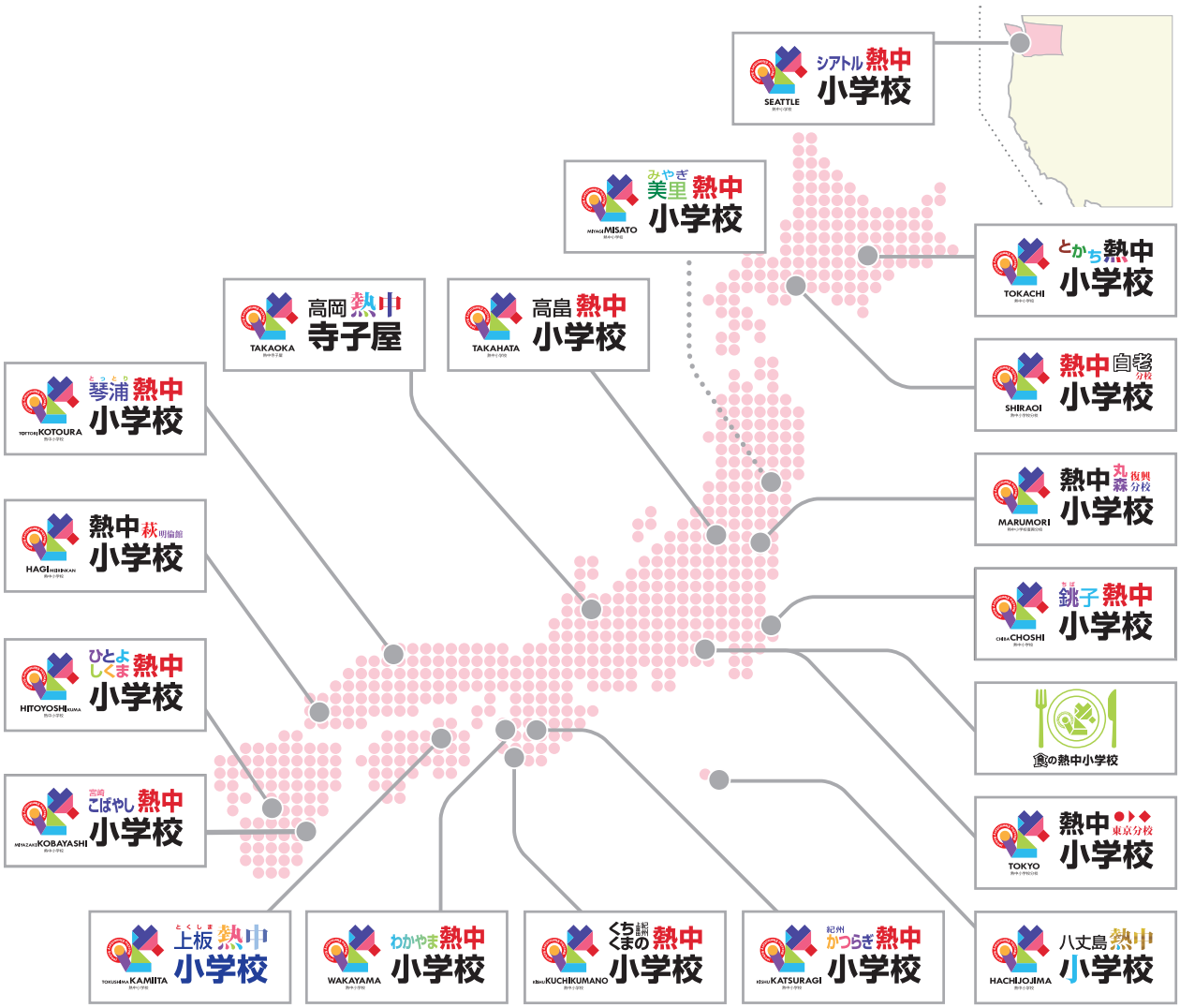
熱中小学校の企画と最初の数年間の開校は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災を機に堀田一芙（現一般社団法人熱中学園代表理事）が東京赤坂に開設した、「オフィス・コロボックル」というシェアオフィスに集まる仲間から生まれました。

山形県高畠町の廃校再生のアイデアを考えて欲しい、という偶然の依頼から 2015 年 10 月に「熱中小学校（現高畠熱中小学校）」が開校。生徒 84 人、先生 20 人のスタートでした。

翌 2016 年 8 月に「會津熱中塾」、9 月に「高岡熱中寺子屋」、10 月に「八丈島熱中小学校」が創設期の学校として誕生しました。当時国が内閣府に「まち・ひと・しごと創生本部」を創設し、「地方創生加速化交付金」の支援もいただいて、2017 年には「十勝さらべつ熱中小学校」（現在のとかち熱中小学校）、「とくしま上板熱中小学校」「宮崎こばやし熱中小学校」と 7 校、生徒数 600 人、先生 140 人体制に拡大しました。その後いくつかの新規開校やミッションを終えて閉校したり、また復活したりと入れ替わりながら、延べ開校 24 校のうち現在は国内 15 校、海外 1 校（米国シアトル）、生徒数は 1000 人以上、先生約 350 人となっています。

2019 年 3 月に持続的な発展を支えるために一般社団法人熱中学園を設立しましたが、各学校は自立した運営をしている自立型ネットワーク組織です。

自助（授業料収入や個人や企業寄附など）、共助（施設の委託管理や町おこし隊の支援など）、公助（補助金など）の組み合わせ方はそれぞれの学校が独自のスタイルを持っています。企業版ふるさと納税制度の活用は各役場との共同作業で進めてきました。特に（株）内田洋行様には継続的に支援を賜り、高畠熱中小学校の 10 周年記念式典では高畠町から感謝状が渡されました。これからも民間の力を成長させながら、地域や行政と共に、生徒と先生が主役というユニークな活動として持続可能性を模索してまいります。



熱中小学校 一覧表

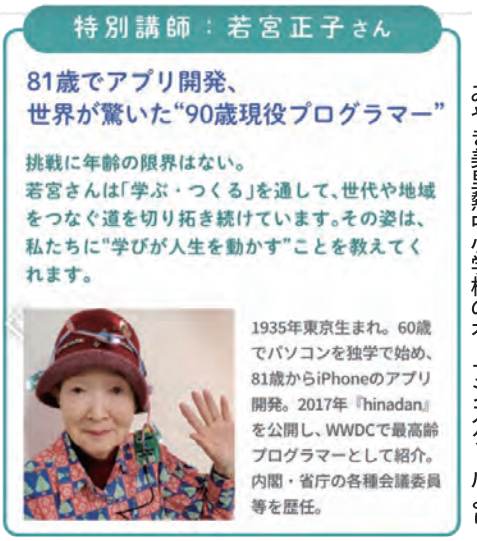
	学校名	O 設立年月 C 閉校年月 R 再編年月 休 休校中	校長・塾長・代表	教頭・副塾長・副代表	事務局 拠点等
1	高畠熱中小学校	O 2015/10	初 代 重松 大輔 (株)スペースマーケット代表取締役社長 2代目 内海 弦 前アーム(株)代表取締役社長	初 代 玉川 憲 (株)ソラコム代表取締役社長 2代目 宮原 博通 (株)和のくらし文化研究所 所長	長谷川 智之 NPO法人はじまりの学校 旧高畠町立時沢小学校
2	會津熱中塾	O 2016/04 C 2023/03	新城 猪之吉 末広酒造(株)代表取締役社長(当時)		羽金 義久 (一社)会津熱中塾 末廣酒造 嘉永蔵ほか
3	高岡熱中寺子屋	O 2016/09	初 代 前田 一樹 富山大学芸術学部名誉教授(ご逝去) 2代目 荒井 公浩 荒井学園 理事長	初 代 高橋 陽子	小泉 昇 高岡熱中寺子屋 運営委員会 高岡まちなかスタートアップ支援施設「TASU」
4	八丈島熱中小学校	O 2016/10 休	岸田 徹 (株)ネットラーニング代表取締役会長		(一社)八丈島熱中塾 旧末吉小学校ほか
5	とかち熱中小学校 (旧：十勝さらべつ熱中小学校)	O 2017/04 R 2021/04	初 代 山井 太 (株)スノーピーク代表取締役会長 2代目 長澤 秀行 帯広畜産大学長	初 代 長澤 秀行 帯広畜産大学長 2代目 北村 貴 (株)グロッシー代表取締役 2代目 中川 裕之 (株)ノラワークスジャパン代表取締役	亀井 秀樹 (一社)北海道熱中開拓機構 帯広畜産大学ほか
6	とくしま上板熱中小学校	O 2017/04	丸山 力 元徳島県最高情報統括官	近藤 紳一郎 (株)スタン 代表取締役社長	瀬部 昌秀 (一社)ジャパンブルー上板 伝統工芸体験施設「技の館」
7	宮崎こばやし熱中小学校	O 2017/04	初 代 原田 英男 (一社)畜産環境整備機構副理事長 2代目 大窪 和利 (有)ダイワファーム 代表取締 (一社)熱中こばやし 代表理事	永田 英一郎 (株)サザンクロスシステムズ 代表取締役社長	吉谷 直美 (一社)熱中こばやし 小林市市民活動支援センター
8	熱中小学校 東京分校	O 2017/07	大久保 昇 (株)内田洋行 代表取締役社長	初 代 澁谷 哲一 東京東信用金庫会長 2代目 中田 清史 東京東信用金庫理事長	亀田 俊 (一社)熱中学園 すみだ北斎美術館ほか
9	信州たかもり熱中小学校	O 2018/04 C 2023/3	塚越 寛 伊那食品工業(株)最高顧問	林 靖人 信州大学副学長	坂元 亜佑美 (一社)熱中たかもり 高森町アグリ交流センター(旧蘭植物園)
10	紀州くちくまの熱中小学校	O 2018/04	初 代 浦 聖治 クオリティソフト(株)代表取締役CEO 2代目 金谷 清道 (株)カナセ 代表取締役社長	長井 保夫 プラム食品(株) 代表取締役会長	沖田 茂利 (一社)紀州くちくまの 未来創造機構 旧上富田町立生馬小学校芦山分校
11	越知ぜよ！熱中塾 こうち仁淀ブルー熱中塾	O 2018/09 R 2021/09 C 2024	能勢 秀樹 住友林業(株)取締役(当時) 内田 泰史 内田脳神経外科理事長	黒笹 慈幾 高知大学地域協働学部客員教授	松田 健 こうち仁淀川ブルー熱中塾運営事務局 おち仁淀川キャンプフィールドほか
12	とっとり琴浦熱中小学校	O 2018/10	竹歳 誠 三菱地所(株) 顧問	足立 日出男 (株)高野組取締役	佐伯 健二 (一社)熱中ことうら 旧琴浦町立以西小学校
13	シアトル熱中小学校	O 2019/02 休	清水 楡華 Advisor, Bellevue Children's Academy		金 俊次 Bellevue Children's Academy
14	熱中小学校 萩明倫館	O 2019/10	鈴木 寛 元文部科学副大臣 東京大学教授・慶應義塾大学大学特任教授	初 代 井上 伊三郎 (株)井上商店会長 初 代 田子 みどり (株)コスモピアファウンダー 2代目 藤原 由佳 (株)コープ葬祭 代表取締役	萩市役所総合政策部 産業戦略室 萩・明倫学舎（旧明倫小学校）
15	熱中小学校 江丹別分校	O 2020/04 C 2023/03	初 代 浅田 一憲 (株)ハウディ取締役会長 2代目 伊勢 昇平 伊勢ファーム	用務員 伊勢 昇平 伊勢ファーム 教 頭 毛笠 史寛 (特非)しらおい創造空間「蔵」 会長	初 代 大村 紫乃 (一社)世界一の村 2代目 栗栖 マキ (特非)しらおい創造空間「蔵」
16	熱中小学校 白老分校	O 2022/04	毛笠 史寛 (特非)しらおい創造空間「蔵」 会長	米本 智昭 チャプレン / 日本臨床宗教師会認定臨床宗教師	栗栖 マキ (特非)しらおい創造空間「蔵」 しらおい創造空間「蔵」
17	熱中小学校 丸森復興分校	O 2020/06	初 代 佐藤 勝栄 (一社)丸森町観光振興公社理事長 2代目 菅原 久吉 阿武隈急行(株)代表取締役社長 3代目 冨田 正則 阿武隈急行(株)代表取締役社長 4代目 安部 信次 つぶら農園主	初 代 宍戸 克美 丸森町教育委員 2代目 安部 信次 つぶら農園主 3代目 佐藤 君枝 丸森町行政運営推進委員(区長)/ 防災士	伊藤 航 (一社)熱中学園 蔵の郷土館 齋理屋敷ほか
18	ちば銚子熱中小学校	O 2020/10 C 2023/03 R 2025/04	木樽 正明 元千葉ロッテ投手 小林 富雄 東京大学名誉教授 【名誉校長】大間 ジロー 元オフコース・ドラマー	小倉 和俊 (株)銚子スポーツタウン代表取締役 佐久間 快枝 チョウシ・チアーズ(株)代表取締役	小島 妃佐子 (一社)ちば銚子熱中 創造機構 銚子マリーナほか
19	きもつき熱中小学校	O 2021/04 C 2024/03	東川 隆太郎 NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事	隅崎 かずよ NPO法人きもつき情報化推進センター副理事長	肝付町役場 企画調整課内
20	ひとよしくま熱中小学校	O 2021/10	平野 洋一郎 アステリア(株)代表取締役社長	立山 まき子 立山商店 女将 / 行政相談委員 瀬崎 公介 (株)シークルーズ 代表取締役	富山 孝治 (一社)ドットリバー 人吉市まち・ひと・しごと総合交流館
21	おきなわ熱中小学校	O 2021/10 C 2023/03	【名誉校長】セイコウ・イシカワ ベネズエラ・ボリバル共和国特命全権大使 【校長】早川 周作 琉球アスティーダスポーツ(株)代表取締役社長	金城 馨 コザ信用金庫理事長	比嘉 大志 NPOコザまち社中 旧Hanaわらび （多世代向け教育・交流拠点）
22	紀州かつらぎ熱中小学校	O 2022/10	八塚 政彦 ゼネル薬工伊都(株) 代表取締役	中前 光雄 かつらぎ町社会福祉協議会会長	大家 啓徳 かつらぎ町天野地域交流センター
23	わかやま熱中小学校	O 2023/04	広谷 純弘 建築家 (株)アーキヴィジョン広谷スタジオ代表取締役社長	豊田 英三 ゆたかグループ 代表取締役社長	寺田 尚平 (一社)和歌山新城下町DMC Work & Study IDEA中之島ユタカビル
24	食の熱中小学校	O 2023/09	【名誉校長】雜賀 慶二 東洋ライス(株)代表取締役 【校長】柏原 光太郎 (一社)日本ガストロノミー協会 会長	松田 智生 丸の内プラチナ大学副学長、高知大学客員教授 綛谷 久美 書籍・雑誌編集者 / (株)エディットライフヨコボウ代表	亀井 秀樹 (一社)熱中学園 理事 3×3 Lab Future 東京ユビキタス協創広場 CANVAS
25	みやぎ美里熱中小学校	O 2026/04 (開校予定)	引地 豊 (株) 国本 代表取締役	名雪 祥代 サックス奏者/ forest bird music office代表	氏家 滉一 みやぎ美里熱中小学校準備事務局 美里町立美里中学校

熱中小学校のコアバリューはボランティアの先生にある。

■デジタルを友とする熱中人は年齢を超える

熱中小学校プロジェクトが継続できたのは SNS の活用など生徒さんがデジタルの力を味方に出来た事が大きい。熱中小学校の最年長先生である、若宮正子さんの授業はかなりの学校で複数回実施していただいた。直近でも来年 4 月に開校する「みやぎ美里熱中小学校」のオープンスクール講師として、'創造的な人はデジタルを友にして'、と解りやすく授業をしていただいた。このおかげで 2020 年のコロナ禍で、全国一斉に ZOOM を導入し、リモートからの参加を可能にして、ほとんど中断なくすべての学校がこの時期を乗り越えることができた。事務局がスマホや SNS の使い方の補習をした学校も多い。

Lifelong Learners（一生学び続ける人達）の鍵は進化するデジタル力の取り込みにあった。



みやぎ美里熱中小学校のオープンスクールより



■熱中プロジェクトが 10 倍わかる『動画力』

熱中小学校開校以来「放送室担当」として新しく開校する学校の PR ビデオをほとんど手掛けていただいた中村寛治先生の「これが動画力だ！」の授業のインパクトは大きく、「熱中動画大賞」など、生徒さんのスキルが飛躍的に向上した。

2018 年に「シアトル熱中小学校」の開校に向けてオープンスクールをやろう、そのために PR ビデオを作ろうということになり、当時（株）ヒューマンセントリックスという、企業向けビデオ制作会社を経営されていた中村寛治さんにビデオ制作を依頼した。中村寛治さんは、2018 年 8 月、当時の部下だった青柳さん（青ちゃん）と 2 人でシアトル到着後 55 時間で 2 本のビデオを制作してくれた。日本との時差を使って日米で突貫作業をしてくれて、シアトルでの Japan Fair の中で熱中小学校の説明の時間で披露された。

https://www.youtube.com/watch?v=eP92draXE6k&t=4s



■災害からたくましく立ち上がる 2 つの熱中小学校

2019 年の宮城県丸森町の台風災害後には「高畠熱中小学校」の生徒さんが開校支援を行い、その後丸森の生徒たちは阿武隈急行の復活のボランティア活動にあたった。

2020 年、九州豪雨による球磨川の氾濫に襲われた開校準備中の「ひとよしくま熱中小学校」は災害後いち早く「宮崎こばやし熱中小学校」の原田英男校長を含め生徒のみなさんが現地に支援入りし、やがてクラウドファンディングで全国の関係者が応え、翌年「ひとよしくま熱中小学校」開校にこぎつけた。（ビデオは大山 正也さん制作）

https://www.youtube.com/watch?v=GRFa_C65ego

シアトル熱中小学校開校に向けて

ひとよしくまクラファン

コアバリューはボランティアの先生

熱中小学校のコアバリューはボランティアの先生にある。

先生のみなさま

教室では年齢、職業が違う生徒さん達から学び熱量を受けて、先生と生徒の距離感がなくなって新鮮な経験をしていただいてきた。現在の登録先生は約 350 人。最近では各地の学校が地元ユニークな先生も開拓していて地元の人資源の再発見をすることも意義深い。各期（6か月）の始まりにあたり、各地からの希望の先生はドラフト会議でアサインされ、事務局は多忙な先生方との日程交渉に入る。貴重な時間をいただくにあたって事務局は実施後に先生データに記録し、ボランティア活動の'見える化'を目指している。

https://necchu-shogakkou.com/teacherlist/

先生	教科
粟飯原理咲	社会
浅井由剛	美術
浅田一憲	理科
浅沼拓仁	社会
安立清史	社会
足立日出男	琴浦教頭
安孫子亘	音楽・動画
安部敏樹	社会
安部純子	社会
安部信次	丸森分校校長
天野春果	体育
新井和宏	社会
荒井公浩	高岡寺子屋校長
荒木貴之	理科
荒井優	社会
安藤邦廣	図工
飯尾裕光	共生
池田卓夫	音楽
池田誠	社会
池田めぐみ	体育
生駒大壱	社会
石井重成	社会
石川文子	放送
石黒八郎	家庭科
石戸奈々子	情報
石原直	社会, 共生
石原昇	理科
伊勢昇平	共生
いちのせかつみ	生活
市原美穂	保健室
泉智子	生活
井戸美枝	生活
稲見昌彦	理科
犬飼博士	体育
井上伊三郎	萩明倫館
井上貴至	社会
井上優	社会
猪俣昭夫	生活
伊部菊雄	理科
今井了介	音楽
岩崎由美	体育
上松恵理子	新教育
請川博一	理科(技術)
碓井俊樹	音楽
内田泰史	保健室
内海弦	高畠校長(理科)
兎洞武揚	社会
浦島久	英語
浦聖治	IT
江渡浩一郎	社会
江良慶介	生活
遠藤諭	社会
大江英樹	生活
大久保昇	東京分校校長(理科)
大窪和利	こばやし校長(理科)
大工原忍	保健
大越賢治	スタートアップ
大澤真	社会
大田英二	共生
大友佐俊	生活
大原あかね	美術
大原一郎	家庭科
大平まゆみ	音楽
大間ジロー	音楽
大宮透	社会
大村亘	音楽
大桃綾子	社会
大森京太	特別教諭
岡秀昭	体育
小笠原慶二	社会科
岡田慶子	社会
岡田信一郎	社会
岡原真由美	美術
岡本栄理	ビジネス・起業
小川典子	生活
沖山賢吾	道徳
小倉和俊	銚子
大津山訓男	情報
小野裕之	社会
小野平八郎	社会
小野龍光	道徳
開沼博	生活
覺正寛治	社会
鹿熊勤	理科
柏原光太郎	食の熱中校長
綛谷久美	食の熱中教頭
梶明彦	観光開発
柏尾哲哉	観光開発
加渡いづみ	生活
加藤優子	お祭り担当
金森正晃	学芸会
金川裕一	生活
金谷清道	くちくまの校長
神田優	社会
河野理愛	起業
苅谷剛彦	社会
苅谷夏子	国語
河合祐子	社会
川嶋諭	広報委員
川村晶子	国語
ガンプ鈴木	体育
神崎亮平	技術
神林サリー	英語
岸田徹	八丈島校長
木田幹久	社会
北川正恭	たかもり
北城恪太郎	PTA会長
北村貴	さらべつ教頭
木樽正明	体育
橘川幸夫	音楽
城戸淳二	理科
木村敬	社会
KiLa	マジシャン
金城馨	美術
工藤英良	家庭科
久保田克昭	体育
隅崎和代	きもつき
久米信行	道徳
倉崎憲	学芸会担当
栗原博	社会
黒笹慈幾	社会
黒田泰裕	共生
黒森洋司	家庭科
毛笠史寛	しらおい校長
神山恵美子	社会
小島妃佐子	情報・IT
小島英揮	生活
小杉博俊	図画工作(発想図工)
小谷あゆみ	共生(農業)
小谷翔一	社会
小林晋也	社会
小松一之	社会科
小林富雄	銚子校長
近藤紳一郎	上板教頭(社会)
近藤洋祐	情報・起業
雑賀慶二	食の熱中名誉校長
斎藤賢治	生活
齋藤利明	丸森復興分校
斎藤紀男	理科
阪井和男	社会
坂尾英彦	共生
坂田千代子	国語
崎野隆一郎	観光開発
佐久間快枝	銚子教頭
硲弘一	生活
佐々木恭子	理科
佐藤君枝	丸森分校教頭
佐藤真希子	ビジネス
佐藤正浩	音楽
澤上篤人	社会
沢樹舞	家庭科

先生のみなさま

先生	教科
重松大輔	起業
宍戸克美	丸森復興分校
柴田孝	社会（ものづくり学）
渋澤健	社会
澁澤寿一	共生
澁谷哲一	社会
清水楡華	シアトル校長
下川和男	情報
新谷秀夫	国語
新保吉伸	家庭科
新村浩隆	共生
菅原久吉	丸森分校
杉山智之	理科
鈴木薫	家庭科
鈴木健太	生活
鈴木晴彦	国語
鈴木寛	萩明倫館校長
須藤晃	国語
住友達也	社会
セイコウ・イシカワ	おきなわ名誉校長
瀬崎公介	ひとよしくま教頭(ビジネス)
仙道富士郎	保健室
相馬行胤	社会
曽根原千夏	道徳
高橋明子	社会
高田直樹	体育
高橋政代	保健室
田中森士	ビジネス・起業
高原淳	美術
竹田元	音楽
竹歳誠	琴浦校長
竹村譲	特任用務員
田子みどり	萩明倫館
田澤由利	生活
田代剛	生活
立花貴	生活
立山まき子	ひとよしくま教頭(家庭科)
田中敦	算数
田中裕子	特任用務員デザイン担当
谷川洋	社会
玉川憲	起業
玉城ちはる	道徳
樽谷雅好	生活
千葉祐士	家庭科
辻育子	生活
土谷享	美術
坪田知己	国語
寺本英仁	生活
外ノ池祐太	IT
冨田さとこ	生活
冨田潤	美術
富山孝治	情報・IT
豊田栄三	わかやま教頭
中みね子	放送
永利敦	社会
長井保夫	くちくまの教頭
中川敬文	生活
中川裕之	とかち教頭(共生)
中川めぐみ	ビジネス・起業
中阪雅則	社会
長澤秀行	とかち校長(理科)
中島信也	伝達

先生	教科
中島武	給食
長田城治	社会
永田英一郎	こばやし教頭
中田清司	東京分校教頭
中野晴啓	社会
中前光雄	かつらぎ教頭
中村寛治	放送室
中村健	社会
中村俊介	情報
中村貴裕	起業
中村龍太	ビジネス・起業
仲本千津	起業
仲山進也	体育
成澤俊輔	生活
名雪祥代	美里教頭
新居日南恵	保健室担当
西岡一洋	農業ICT
西澤隆	体育
新田信行	道徳
根岸裕孝	社会
野崎洋光	家庭科
野田雄一	美術
野村文吾	社会
荻原寛	音楽
林口砂里	社会
橋本久義	社会
橋本麻里	図工（美術）
畠中智子	美術
花岡和佳男	共生（水産）
花堂純次	図工
早川周作	おきなわ
早川誠二	生活
早川正士	理科
林靖人	社会
原田英男	共生
ピーター・バラカン	音楽
東川隆太郎	きもつき
引地豊	美里校長
久松猛朗	映画製作
平田透	社会
平野洋一郎	ひとよしくま校長
平原誠之	音楽
平藤雅之	情報
広谷純弘	わかやま校長(図画工作)
福田幸志郎	道徳
藤井直敬	理科
藤野英人	社会
藤元健太郎	情報（ネットビジネス）
藤原由佳	萩明倫館教頭
Brandon Hill	起業
古川享	新技術
古川英光	理科
古山拓	美術
外村仁	起業
保志弘一	共生
星賢孝	美術
細野昭雄	図画工作
堀田一芙	用務員
堀浩哉	図画工作
堀口純一	ビジネス・起業
北郷泰道	社会
前田茂雄	共生（農業）

先生	教科
まきりか	音楽
間下直晃	生活
松浦真弓	社会
松岡祥仁	情報・IT
松崎了三	生活
松澤亜美	社会
松田健	仁淀ブルー熱中塾
松田智生	食の熱中教頭(生活)
松本美佐	家庭科
眞鍋邦大	生活
丸山力	上板校長
水野雅弘	観光開発
溝口泰雄	起業
宮川順子	家庭科
宮川将人	共生
三宅琢	保健
宮島衣瑛	情報（新教育）
宮原博通	高畠教頭(社会)
森万喜子	美術
村岡浩司	起業
村上健	家庭科
村口和孝	スタートアップ
村山太一	家庭科
校條諭	社会
八重柏冬雷	書道
八木尚子	家庭科
八塚政彦	かつらぎ校長
谷知大輔	社会
籔内祥司	社会
山井太	生活
山口純哉	生活
山崎和彦	工作
山崎史郎	特別教諭
山下崇	家庭
山下武秀	技術
山下正博	社会
山田淳	体育
山田直記	ビジネス・起業
山田昌弘	社会
山田玲子	家庭科
山寺純	ベンチャービジネス
山根大助	家庭科
山本茂行	社会
山本貴博	理科
山本英明	共生（農業）
山本陽平	お祭り担当
湯之前清和	保健
横山カズ	英語
吉岡有一郎	情報・IT
吉澤隆	情報
四津谷道宏	道徳
米司隆明	体育
米田肇	家庭科
米本智昭	しらおい教頭(道徳)
米山公啓	保健室
若杉浩一	道徳
若宮正子	情報
脇雅昭	社会
和田有史	家庭科
渡邉嘉藏	社会
渡邊美由記	体育

＊全国登録先生･2025年12月



熱中小学校10 周年記念レポート

地方創生の10 年後の答えは「大人の学校」だった

東京大学大学院情報学環 准教授
開沼 博



10周年記念式典の様子（2025年10月12日）

熱中小学校 10 周年記念講演まとめ
―高畠熱中小学校 10 周年記念式典に際し、社会学者として東日本大震災や地方創生の研究で活躍される開沼博先生にご登壇いただきました。熱中小学校 10 周年の調査レポートと共に当日の講演の様子を記します。―
要約：高畠熱中小学校事務局長谷川

はじめに ――社会学者として活動を続けている理由

「開沼と申します。私は社会学というのをやっております。2011 年 3 月 11 日に東日本大震災と原子力発電所の事故というのがありました。ああいったものについて幾つも研究をしたり、本を書いたりということもしてまいりました。また熱中小学校でも災害と社会の向き合い方みたいなことをお話しするということで関わってまいりました。」

「結論から申し上げますと、熱中小学校の取り組みは地方創生政策の一つの最高傑作とも言っていいようなものなんじゃないかということが見えてきたという事で、このゴールに向かって話を進めて行きます。」

―冒頭に挨拶と今回の結論を述べた後、開沼氏は社会学者を志した理由として３つの原体験があると語った。―

「高校生の時全国ディベート甲子園でベスト８になったんですけども、その時のテーマが２つあったんです。１つが日本は道州制を導入すべきかどうかっていう話、もう１つは首都機能移転についてでした。福島茨城栃木あたりに首都を持っていこうという構想は、そこそこ真面目に政策論として議論されていたりしました。そういったことについて高校生のうちに考えたことは何か自分がもやもやとして残っていたというか、地元の衰退も肌で感じてここで生きるということは想像できないという風に思っていたことがあったんですね。」

「２つ目に自分自身が研究者になって大学院生になっていた時にですね。高校生が自分で放射線の問題について研究するという取り組みを行いました。当時指導いただいた先生が非常に教育熱心で、国際論文誌っていうところに高校生が自分で調査して書いたことを発表できました。やっぱりこれは非常に地元の人を勇気づけたし、地元の人自身が大人達自身も知らないことを教えてくれたっていうのが、私の２つ目の原体験だったりもします。」

「そして、３つ目の原体験というか、まさに今やってることですが、東日本大震災から 14 年になりますが、今も福島の中高生に向けて中々知る機会のない裏側の探究など色んな指導をしています。大学生とゼミなども行っていますが、こうした取り組みから私自身も学ぶことが非常に多いです。」

内発的動機と問いの重要性

―自身が研究者に進んだ原体験に絡めて、問いと内発的動機が重要と氏は語った。―

「問いというのは色々あります。自分がどうすべきかっていうのもあるし、そもそも何なんだろうっていうのもある。自分の中から何か湧き上がってくる。これをやろうとか、これやらなくちゃなっていうこと、そしてそのために何が必要なのかという動機、そしてその根幹にある問いというのが、恐らく私達にとって、それは 7 歳にとっても 17 歳にとってもあるいは 77 歳にとっても、その人たちの新しい道を開いていくのかなというふうに思うんですね。」

熱中小学校と内発的動機

―また当日の講座を配信しているスタッフと機材に触れてこう語った。―

「先ほど配信の方にも話を聞きました。普通だったら何か業者に頼んで数十万くらいかかってしまう。それをここでは学んで自分達でやっている、また全国の熱中小学校でもコロナ対応を通じてこのノウハウをしっかりと得ている。やっぱりこういう細部に全体が宿ると思うんですよね。」

「熱中小学校の素晴らしさってこういう風にとりあえず自分でどうやろう。どうやって解決しようとか、そもそもどうなってんだろうっていうところを深掘りするっていう気持ちや姿勢があって、それを決してこう馬鹿にしないというか、みんなでじゃあやってみようかっていう風に進んでいく。いや『もっと楽な方法はあるでしょ』とか『お金どのくらいかかるの』とか言い出したらキリがない。やらない理由はいくらでもあるんですけども、やっぱりやっちゃっていて。でもプロ並みの機材が揃ってプロ並みのスキルが揃ってるというところ、素晴らしいなと。まさに仲間内で内発的動機と問いがあるというところが、私自身の問題意識とか志向と合うなと思って、今回の熱中小学校についての研究を引き受けさせていただきました。」



記念式典での配信設備の様子

今回の調査の概要

―開沼氏には、なぜ熱中小学校は、10 年間も多くの人を熱中させ続けてきたのか？" という問いを設定し、全国 6 校の熱中小学校（とかち、琴浦、銚子、上板、ひとよしくま、高畠）で運営者・講師・事務局へのインタビューを行っていただいた―

「どうやらこの熱中小学校っていうのは全国に広がった状態で、そこにそれぞれ情熱を持った方が各地に残って動いている、これは他の事例にはないものがあるんじゃないか。前置きが長くなりましたがこうした他にない事例の部分を深くえぐりたいというのが、私の問いになります。」

図 1　各地域の詳細事例



・各地域の詳細事例についてまとめていただいた。一カ所で終わる特異的な取り組みではなく活動が全国に広がり、多様な運営体制や経営モデルを模索している点が特にユニークな点と氏は語った。

ここ10年の地方創生のムーブメントとの位置づけ

―開沼氏は、2015 年からの 10 年間で行われた各地の地方創生のムーブメントと熱中小学校を比較してこう語った―

「東北あたりでも官民連携でいい感じの施設できてますって事例とかが大分取り上げられました。あと、四国の方で IT 企業がいっぱい来ましたよっていう事例とか 10 年前にはあって、もちろんそれはずっと成功してるんですよ。それは素晴らしいけれども、ではそこの人たちの成功モデルが周りにどんどん波及していったのかというとそうではなく、地方創生ってのがあったねという話に落ち着いている事実もあると思います。」

「またわかりやすい所で、ゆるキャラやご当地キャラやあとＢ級グルメとかですね、10 年前ぐらいはそういうのがありました。自分のところでもやろうっていう話になったりもして盛り上がりました。でも最近 B 級グルメって聞かないなとかゆるキャラがどうしてるっていうのは、なかなか地域にそれぞれ根付いているのはもちろんありますけども、何かこう一過性のものになってしまっているところで、それに対してどうやらこの熱中小学校っていうのは全国に広がった状態で、それぞれ情熱を持った方たちが続けているようだぞと。」

インタビューを通じて見えてきた共通の魅力

「今回 6 ヶ所の方々にご協力いただきました。各校で『参加者の体験が濃密だよ』と言っていました。いやいや、それは別に他のイベントでも濃密なのもあるでしょっていう話で、次第にこういう質問するようになってたんですね。『例えば、地方の自治体や商工会青年部などでまちづくりのディスカッションや頑張って盛り上げようというイベントもあるけども、それと何が違うんですか』」

「１つの回答が熱中小学校の場合は、まず講師との距離感が近いっていうところ。それがそのまま生徒にもいい形で影響して、まさに熱中みんな議論している。普通だったら講師が来て喋って質問がちょっとあってみんな帰る。そこだと何のつながりも生まれないけど、熱中の場合はそこでみんなで話が始まるんだと。また講師自身もそこの地域にちゃんと来てちゃんと着地をして、地元のよさとか気候や風土の話とか聞いていくっていう。その講師と地元の方の温度感の調整っていうのが行われるので、非常に参加者の体験が濃密だという話がさまざまなエピソードを通して聞かれました。今、熱中小学校に集まっている方は良さがわかっているので普通のことだと思っているかと思いますけど、普通じゃないんだよってことをお伝えするのが、私が研究者として第三者として申し上げるべきことかなって思って語っています。」

「２点目も近しい内容で、講師のストックが重要であるという事。何かしらの課題や理想があってそれを実現しようとした時に、それについての本を出してるような人とか、すごい専門性を持ってそうな人ってアプローチしたくても、本読むだけで終わっちゃったりとか、何か動画で遠巻きに見るっていう程度で終わってしまう。じゃあ大々的に自治体がやるような偉い人のセミナーみたいにやると、もう大がかりでみんなでもすごい準備して動かなくちゃ駄目になって大変だったりする。一方熱中小の場合は講師が交通費旅費のみでボランティアで来るという前提がある。だから地域をどうにかしたいって熱量の高い人が講師として登録してくれていて、しかもそれが数百人規模であるんで、今地域で求められてる課題やいろんな知見というのをうまくピックアップできるっていう制度になっている。

もちろん、世の中には講師派遣のオンラインサイトみたいなのも色々検索すると出てくるっていうのはあるけれど、本当に熱心にやってくれるのかなとか、この地域のことを考えてくれるのかなっていう前提はなかなか揃わない訳ですね。そこの価値観が最初から共有されているということがやっぱりいいんだよというのが様々な形で色んな方から出てきました。」

「そして３つ目が全国ネットワークですね。実際の所、熱中小っていう看板を付けなくても、このネットワークは無くたってやろうと思えばできるじゃないですか。例えば参加者同士で話させるみたいなのはできなくはないし、そういう類似のことをやってるようなまちづくりワークショップ的なものっていうのもなくはない。そんな風に聞いたら、いや違うんですと

横がつながっていて、横がいいことやってるなって思ったらそれが真似できたりする。今日は高岡からも会場に来ていただいてますが、私も高岡で大変よくしていただきました。高岡と山形って近いようで交通的にも実際大変なので、本来繋がりえないんだけどもそこが繋がっていく。もちろん九州とか北海道にも姉妹校があって繋がっているのも凄いですね。そうした同じ目線だけれど多様なコミュニティの中で、何か良いプログラムを作ろうかとか、自分達でどうやって参加者に楽しんでもらえるようにしようかと考えて、学校の部活とか、修学旅行とかやろうかって事が動いている。こうした活動を通じて能動性をお互いに喚起していく。
熱中小学校のネットワークに入ろうが入らないっていうのは別に自由なんだけども、やっぱりこうした横の繋がりがないと駄目なんですっていう声が聞かれました。なのでこれが熱中小ネットワークの価値なのだろうと考えました。それが３つ４つではなく 10 個以上ぼこぼこでてきたっていうのは素晴らしい成果だなということです。」

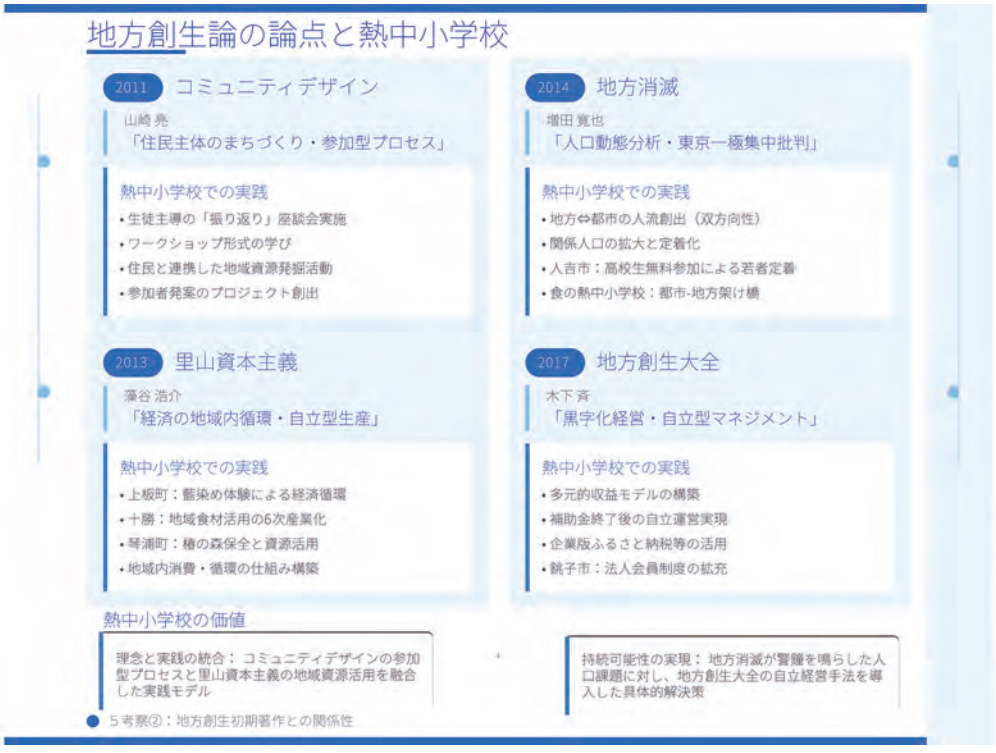
“関係人口”に先駆けた取り組みとして

「あとは関係人口ですね。関係人口という言葉が出てきたのがいつかというのを私も改めて調べ直しましたけども、2015 年当時の段階では地方創生の中に関係人口という言葉はありませんでした。今は何冊も関係人口ということは出ていますが当時書籍もなかったです。やっぱり 2020 年つまり 5 年前ぐらいから今皆さんが普通に使っている関係人口という言葉が出ました。つまり、関係人口という言葉がない時から、熱中小は関係人口づくりを実践していたわけですね。」
「どんどん全国ネットワーク広げるという活動もそうですね、地域外から色んな人が来てその場を好きになるということで、関係人口というテーマで語られる内容そのものです。なので、関係人口という言葉が普及し政策にも反映される前からそういった事をやってこられたのかなというところです。」
※関係人口とは特定の地域に居住していなくても、経済的・文化的にその地域と多様な形で継続的に関わる人々のことを指す。観光や移住ではない新しいかかわり方として注目を集める。

世界的な動きと熱中小学校の学び

「熱中小学校の現場で起こっていることっていうのが、実は全国的、全世界的な動きと言ってもいいですけども、そういったものにもつながっているよというところを捉えていきたいなと思っています。」
「ここ５年ぐらいですかね。先ほどもふれましたが中高生と一緒に学ぶというようなこともやってきましたんで、その中で知ったことなん

図２　地方創生論の要点と熱中小学校



・関係人口以外でも、地方創生の中でも中心的な４つの論について、熱中小学校の取り組みの中でどう実践されているかとリサーチいただいた。すべての論の要点をしっかりと押さえていると氏は語った。

ですけども、国語算数理科社会と並んで探究っていう科目は必修化されました。特に主体的対話的な学び、そして個別最適な学びを重視しています。」

「中々伝わりにくいので具体例を出すと、私も高校生たちと学校の外に出て PBL（Project Based Learning）をやっています。つまり何かプロジェクトを立てて、それを元にして活動してくという事です。」

「そのためには国語の知識も必要だよね。外国人にも伝えなくちゃ駄目なビジネスをやるんだったら英語も必要になるよね。あ、何か農業をやるんだったら、理科の知識も必要になるわね。いや、それを売るんだったら、社会の知識も必要なの。とこのような学び方が探究や PBL って話ですね。」

「これは熱中小学校という場で皆さんやってきた事そのものなわけですよ。何か商品を作ってみんなで売り出そうとか、シェアハウスやゲストハウスみたいなことやってるとかですね。」

―熱中小学校は特にまちづくりや教育的な面で国内や世界でも最先端を行く事例として、その可能性について改めて言及いただいた―

富士山が噴火する時は来るだろうか？

―新しい発明や技術によって人の暮らしや仕事が変わっていく事について触れながら、未知の事を探究する意義について以下のように語った―

「多分今産業革命の時代から 1 周回っている事を踏まえて言いたいのは、何が分からないかが分からないような時代になっているという事。つまり、未知の問題や答え無き問いに向き合わなければならないことがいろいろ増えていますよねというようなところです。」

「これは私が熱中小学校で講義を任された時にいつも話をする一つなんですけども、富士山って噴火するんでしょうかという話ですね。一応数万年規模で見ると、30 年に一回は噴火してるのが富士山だという風に言われています。でも 30 年に一回噴火してる記憶はないぞと近代ではそうなんですよね。」

「直近では江戸時代、つまり 300 年前に一回噴火しておりますから、300 年間、富士山は爆発していない。30 年に一回爆発する山が 300 年分爆発していないっていうのは、いろいろため込んでいる可能性あるよねということで、国でもいろいろ審議をしています。」

「富士山から噴火した噴煙がどこでどうなるか、例をだすと江戸時代の時は今で言う新宿辺りで 15 センチぐらい降り積もったんですって。新宿が 15 センチならどうにかなるじゃなくて、そこまでの山梨とか神奈川とか、静岡とかは 2 メートルくらい噴煙が積もるだろうという事で家とかは潰れますよね。」

「山形でも雪おろしやると思いますが、雪だったらまだドブに捨てたらいいですけど、灰をドブに捨てたらどうなりますかっていう話ですね。まずドブ全部詰まりますし、頑張って川まで流れたとしたら、川底が多分数 10 センチとか上がるんです。川底 30 センチは上がったりしたら多分堤防とかも頻繁にちょっとした雨とかでも氾濫するってこともあるかもしれません。」

「やっぱり未知の問題が出まくるっていうことは、私たちが生きている間に絶対ないとは言えないというか、そこそこの確率であるよねっていう話もあったりもします。こうした未知の災害による社会への影響と生成 AI のような新しい技術革新による社会への影響はなんか違うかなと思うかもしれない。だけど多分やっぱり私たちが見えていなかった、いろいろな危険性とかですね。考えるべきことっていうのは、色々社会が進めば進むほど見えにくくなってきているのかなというふうに思うんです。」

クリエイティブクラスと３つの T

―アメリカの社会科学者であるリチャード・フロリダ氏の『クリエイティブクラスの世紀』という本を例に出して、クリエイティブな人が集まって豊かになる地域に必要な３つの T があると氏は語った。―

※クリエイティブクラスとは新しいアイデアや技術、コンテンツの創造によって経済を牽引する人々の事を指す。

「１つはタレント（Talent）です。タレントっていうのは才能と訳されますが、多分広い意味での才能なんです。地場のもの食材を使って発酵食品を作るとか、また年配になってからプログラミング頑張ってやる、それも一つの才能なわけですよね。熱中小学校の取り組みでは、中々やろうと思ってもできないような事について、や

れなくはないけれどもっていうところから一歩踏み出すっていうことが一つタレントなのかもしれないと思ってます。」

「次にテクノロジー（Technology)。これも今テクノロジーというと IT のイメージになってしまうけども、農業だってもちろんテクノロジーですし、製造業だって伝統芸能だって伝統工芸だってテクノロジーなわけですね。」

「そして 3 つ目がトレランス（Tolerance)。寛容さですね。外国からのインバウンドや留学生と地域の関係性といった話は各地で色んな議論を呼んでいますが、特に新しい物事をどう受け止めるかというのは非常に重要になってきています。特に衰退する地域の中でね、熱中小学校のような事をやろうとすると、『大変なだけだからやめてしまおう』とか、『そこに集客するなんてとんでもない』っていう話が挙がると思うんですよね。そこをいやいやでもやれるだけやってみようとか、配信もやってみようとか、全国に逆にネットワークを広げる機会じゃないかということで集まるという事がまさに寛容さという事になります。」

「熱中小学校がおそらく無意識にかもしれない所で、3 つの T を集める触媒になっていったのかなというふうにも思います。これまで色んな人たちが集まってきて、いなくなったり、また集まったりして、出会いと別れはあったと思うけれど、今残っている人たちは恐らくこの 3 つの T を持っているような人たちで、そこには年齢や世代とか、そこまでの経歴とか関係なく、そして地域も関係なくなってるのかなと思うということです。」

学び続ける大事さと今後の課題

「学び続けるという事はある種リスクコミュニケーションみたいなもの。それは差別偏見的な話もそうかもしれないし、科学の誤情報とかの話もそう。やっぱりその時に何かあっても耐えられるような、いわば知識のワクチンみたいな情報のワクチンみたいなものっていうのを社会にこうどう撒いておくかってことが重要だという感覚の元、それって一つ教育だなと考えています。熱中小学校のように大人になっても学び合える場があるってことは大事だなというふうに思っています。」

「あと、今後ですね。やはり若手の方をちゃんと育てていくみたいな事は運営の方々からは色んな形で出てきましたね。若手って別に世代や年齢だけの話じゃないんだとは思うんです。ここまで 10 年間やってきたっていうその上で、新しい人が関わる余地みたいなものを作って対話していくということも重要なのかなという風に見えたというところです。」

―最期に学び続ける事と教育の意義、更なる熱中小学校への期待を込めて講演を締めくくっていただきましたー

図 3　課題と展望について。

継続的な運営のための資金は引き続き課題であり、取り組みを牽引する人材や開催する拠点の更新は特に重要な課題であり今後の展望ともなっている。





遠くても、ここに行きたい理由

高畠熱中小学校 第１期生
小寺雅仁

高畠

皆さま、こんにちは。名古屋から通っております第 1 期生の小寺と申します。本日は、高畠熱中小学校の 10 周年という節目にこの場に立てることを、心から光栄に思います。立ち上げに尽力された堀田さんをはじめ、関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

この学校との出会いは、一言の誘いから始まりました。

「山形で先生をやるんですが、来ませんか？」

声をかけてくれたのは、親友の小野龍光さん。縁もゆかりもなかった東北の地、高畠に行くことに、私は不思議と迷いがありませんでした。その一歩が、私の人生を静かに、しかし確実に動かしました。

東京、神戸、広島、名古屋――どこに住んでいても、高畠へ通い続けました。片道何百キロの距離を越えてでも来たいと思わせる場所。それがこの小学校でした。夜の高速を走る孤独な時間も、心は満たされていました。会いたい人がいる、その想いだけで距離の意味は消えました。

教室に入ると、胸の奥がフッとほどけていく。授業が終われば夜風を切って帰路につく。寂しさの中にも温もりがあり、学びたいという空気が私の背中を押してくれました。かつて記者に「なぜこんなに遠くまで通うのか」と聞かれ、答えに詰まったこともありますが、今ははっきり言えます。

――ここに来ると、自分が生きている実感がするのです。

熱中小学校は、私の人生に灯をともしてくれました。ともすれば単調な会社生活に、新しい風を吹き込み、同級生たちからは教科書には無い「生きるヒント」を学びました。

ある日、年上の仲間が言いました。「人生は、いつからでも面白くできるんだよ。」この言葉に、大きく心を揺さぶられました。ここでは誰もが生徒であり、誰もが先生。年齢も肩書も関係ありません。それが熱中小学校の本質だと思います。

通う道中もまた、私にとって大切な時間でした。季節ごとに移ろう風景、車窓に流れる光と影――それらが心を整え、日常をリセットしてくれました。高畠の街並みには、幼い頃に見た懐かしい景色のような、穏やかで優しい時間が流れています。

教室から見上げた空、春の雪解け、夏の入道雲、秋の稲穂、冬の静けさ。そのすべてが私の記憶の中で静かに輝いています。

人生には「帰る場所」「逃げる場所」「目指す場所」があります。私にとって高畠熱中小学校は“目指す場所”でした。ここに来るたびに自分を見つめ直し、また前へ進む力をもらえたのです。出会った人々、交わした言葉――すべてが私の宝です。

そして、私が大切にしている言葉があります。

「一期一会」

どの瞬間も、どの出会いも、二度とない尊いものだと心から思います。

これからも私は熱中し続けます。そして、誰かの“熱中のきっかけ”になれるよう歩んでいきたいと思います。

高畠熱中小学校 10 周年、本当におめでとうございます。そして、私の人生に「熱中」という光を灯してくれて、心からありがとう。

最後に、この道へ導いてくれた親友・心友の小野龍光さんへ。

あなたの一言が、私の人生の扉を開いてくれました。心から感謝します。

2015 年初年度の忘年会





2018 年 8 月
高畠熱中小学校の初の卒業式に向けて、
100 キロマラソンで現地へ駆けつける



世間知らずおじさんの挑戦

高畠熱中小学校 第 19 期生
横山 寿一

私はこの高畠に住んでおり、昨年入学して今年で 2 期目になります。今日は「なぜ熱中小学校に入ったのか」、そして「今挑戦していること」についてお話しします。

私は高校卒業後すぐに陸上自衛隊に入隊しました。幼い頃から飛行機が好きで、航空科を志望し、ヘリコプターの整備員としてキャリアをスタートしました。その後は整備教官として年間 100 名近くの後輩を育成。神奈川、青森、東京、宮城、そして最後は山形・東根と、全国を転勤しながら勤務しました。

自衛隊での生活は厳しくも充実しており、東日本大震災や熊本地震、能登の地震など災害派遣にも従事しました。また国際緊急援助隊として海外派遣も経験し、多くの現場を見てきました。人生を変えるような経験の数々でしたが、最後の方は人事の理不尽さもあり、「もう一度、自分の人生を自分で選びたい」と思い、定年前に退職。合同会社を経て、ドローン事業会社「doSORA（ドソラ）」を創業しました。

ドローンとの出会いは何気ないものでした。先輩から「俺はドローンをやっているんだ」と聞き、負けず嫌いの私は「自分もやってみよう」と興味を持ちました。ヘリの整備士として“飛ばすのはパイロット任せ”だった私にとって、自分で整備し、自分で操縦できるドローンの世界は衝撃的で、瞬く間に夢中になりました。

しかし、起業してすぐに気づいたのは「自分がいかに世間知らずだったか」ということ。公務員生活が長く、言葉遣いや金銭感覚、ビジネスの常識が全く分かっていなかったのです。たとえば「了解です」が通じず、「承知しました」と言い換えるところから学び直しの日々でした。

また、長年地元を離れていたため、高畠で何が起きているのか、同級生がどこで何をしているのかも分からず、孤独を感じていました。そんな時、「熱中小学校」という看板を見かけ、調べてみると面白そうだと感じ、「もういちど、7 歳の目で世界を見てみよう」と入学を決めました。

入学の動機は二つ。ひとつは、さまざまな人の話を聞き、限られた世界から抜け出したいという思い。もうひとつは、新しい出会いを求めてでした。実際、熱中小学校を通じて多くの出会いと刺激をいただき、活動の幅も広がりました。

現在、私はドローンパイロットとして活動し、高畠町新庁舎のモニターで流れている空撮映像を担当しました。映像の編集は、同じく熱中小学校の生徒である山形大学の津田くんと一緒に制作したものです。

今後は、国内初となる 250 キロ超の物流ドローン実用化プロジェクトにも参入し、国交省と連携しながら社会実装を目指しています。また、ドローンを通じた国際貢献にも挑戦する予定です。

ドローンに出会い、そして熱中小学校に出会えたことで、私は再び挑戦する勇気を取り戻しました。この場をお借りして、背中を押してくださった皆さまに心より感謝申し上げます。これからも高畠の一員として、そして熱中小学校の一人の生徒として、地域と社会に貢献できるよう努力してまいります。



ドローン指導中



野外でのデモ



卒業してからが、ますます楽しい

高畠熱中小学校 第 4 期生
齋藤 壽江

高畠

こんにちは。4 期生の齋藤です。
出身は福島で、東京にも 8 年ほど住んでいましたが、結婚を機に高畠へやってきました。初めて訪れたのは秋。9 月の澄んだ空気と美しい風景に惹かれ、「いいところだな」と思い、翌月には結婚を決めました。…ただ、その年の冬の雪には驚きました。

それでも振り返れば、この豊かな自然の中で 3 人の子どもを育て、春の恵み、秋の恵みを味わいながら過ごしてこられたことを、心から幸せに思っています。人との出会いも重なり、80 歳になったときに「いい人生だったな」と思える。それが私の未来予想図です。

私は 4 期生として 8 年間、この学校で学んできました。本日はオープンスクールということで、熱中生ではない方にも、「ここで学ぶのはこんなに楽しいんですよ」とお伝えできればと思います。

入学した当初、「学びに遅すぎることはない」という言葉に惹かれました。大人の学びの場、そして素晴らしい講師の先生方との出会い。これが熱中小学校の大きな魅力です。年月を重ねるごとに、人とのつながりはかけがえのないものになっていきました。

本来、小学校ですから 6 期で卒業ですが、私は卒業後も通い続けています。座学だけでなく、体験学習や遠足など、“ここから飛び立つ学び” がどれも忘れられない思い出となりました。今日は特に印象に残る三つの出来事をご紹介します。

まず一つ目は、2019 年のシアトル校訪問。マイクロソフト社の見学をはじめ、ジャパンフェアのパーティーで阿波踊りを披露しました。この法被はその時の思い出の品です。現地の方々との交流も楽しく、参加できて本当に良かったと思っています。

二つ目は、十勝校の 7 周年行事への参加。若宮先生にもお会いでき、そして念願の気球に乗ることができました。早朝、十勝平野を一望したあの景色は、今でも鮮明に思い出されます。夕食の席では“ひとしの会”の皆さんと出会い、名前つながりのご縁に笑い合ったのも楽しい思い出です。

三つ目は、昨年参加した新庄まつり。山形に住んで 40 年以上になりますが、初めての体験でした。仲間たちと食べて、笑って、お祭りはあっという間に仲間との距離を縮めてしまうものです。
まさに熱中の仲間と過ごす最高の時間でした。こうした体験が、私をこの学校に通い続けさせてくれています。学びの場でありながら、今では“ワクワクする場所”へと進化しています。

卒業は終わりではなく、始まり。英語では Graduation や commencement と言いますが “レベルアップ” や “新たな出発” という意味もあります。私自身、卒業してからが本当に面白いと感じています。

これからも楽しく習う「楽習」を続けていきたいと思います。高畠校は全国の熱中の出発点であり、これからも羅針盤のような存在であってほしい。母親、そしておばあちゃんの目線から見ても、今 10 歳のこの学校を 20 歳まで見届けたい。それが今の願いです。

これからも皆さんと一緒に、笑いながら、学びながら、熱中していきます。ありがとうございました。

2019 年のシアトルジャパンフェアーにて





本物を、身近に。

高畠熱中小学校 第 8 期生
池田 めぐみ

私は池田めぐみと申します。隣町の南陽市在住で、両親・夫・息子の二世代で暮らしています。夫は熊本・天草の出身。夫の実家で初めて飲んだ麦麹の味噌汁には驚きましたが（笑）、色々な違いを楽しめる環境に感謝しています。結婚して 16 年、妊娠を機に山形へ戻り、今はこの高畠熱中小学校 203 号室にオフィスを構えています。

私が熱中小学校に出会ったのは、2018 年。高校のフェンシング部の先輩（30 年来の仲）から「お前、これ好きだと思う。高畠来い！」と誘われたのがきっかけでした。最初は何が起こるのか分からず来てみたら、そこにはピザ窯があり、BBQ があり、「ワイン用ブドウを植えよう！」なんていう話まである。6 年前、5 歳の息子と一緒にブドウの苗を植えました。今では「熱中ワイン」が生まれ、その成長を見守っています。息子が 20 歳になったとき、一緒にそのワインを飲むのが私の野望です。

そんな時間を支えてくれたのが、事務局の長谷川さん。最初は「長谷川さん」でしたが、いつしか呼び捨てになりました（笑）。「やりたいなら、自分で企画してみてください」と言ってくれた言葉に背中を押され、私の“熱中人生”が加速しました。グラスフェッドビーフを味わう会、無農薬鴨の農法を学ぶ会、田植えイベント。思いついたことを次々と実現していきました。

実は私は、2004 年と 2008 年のオリンピックに出場した元フェンシング選手です。長く「夢をありがとう」「希望をありがとう」「感動をありがとう」と言われる立場に少し疲れていました。結果がすべてではない。でも、アスリートにはもっと違う価値を生み出せる可能性がある。この熱中小学校でその新しい挑戦を見つけました。

アスリートが持つ体の知恵を、日々の暮らしや健康づくりに生かす。スポーツとアートを掛け合わせたり、アスリートを田んぼに呼んで子どもたちと一緒に泥だらけになったり、オリンピアンの加藤条治さんに「田んぼで 50 メートル競走」をお願いしたときは、自分でも笑ってしまいました。でも、そういう「本物の体験」が新しい価値を生むと信じています。

活動を続けるために、「ヤマガタアスリートラボ」という一般社団法人を立ち上げました。本物のアスリートの力を地域に生かす拠点として、高畠を拠点に活動しています。そして、継続のためにお米をつくり、その売上を活動資金に充てています。

私が目指す「スポーツ ×〇〇」は、この体育館で行われました。スポーツとアートを融合したワークショップ、VR を使ったバーチャル運動会、ダイラタンシーの科学実験を身体を使って行ったり、コンディショニング教室なども開催しました。柔道金メダリスト・谷本歩実さんにも来ていただき、たくさんの学びとご縁をいただきました。

私は今、「本物を身近にする」ことをテーマに活動しています。スポーツ、食、学び、地域。すべてを“体験”でつなげる場を、ここ高畠から生み出していきたい。
もし「こんなこと一緒にやってみたい」「これ掛け合わせたら面白そう」と思った方がいれば、ぜひ声をかけてください。きっと、また新しい“何か”が始まります。 ありがとうございました！

コンディショニング体験





熱中学園 10 周年に寄せて

高岡熱中寺子屋初代副代表　高橋 陽子



シアトルにて
昆布おにぎりで高岡をアピール
右から堀田さん高橋さん開さん

高岡熱中寺子屋は、平成 28 年 9 月、高岡市が誇る国宝瑞龍寺を舞台に、まさに現代の寺子屋として開校した全国三番目の熱中小学校です。富山大学芸術文化学部名誉教授前田一樹先生が代表に就かれ、私も副代表としてお手伝いすることとなりました。事務局長の開洋子さんや、市役所の職員の方々と、準備から開校まで何度も話し合ったことが懐かしく思い出されます。瑞龍寺大庫裏での授業は寺子屋にふさわしく、特別感がありました。



瑞龍寺四津谷住職と前田一樹先生

当初寺子屋では観光に着目しました。講師の先生の話を参考に実践しながら、ツアーを企画したり、郷土料理を探ったり、祭りに参加したりと、高岡の魅力の掘り起こしに力を注ぎました。御車山ツアー、八尾おわらツアー、獅子舞ツアー、万葉集朗唱ツアー等楽しい思い出が沢山あります。活動が進むにつれ、寺子（高岡では生徒をこう呼ぶ）の親睦が深まり、発酵部、ハーブ部、獅子活部などが発足しました。発酵部自慢のかぶら寿司作りは今でも続いています。また、山田玲子先生にご協力頂いて、万葉集に因んだ弁当「万葉小箱」も作製しました。平成 30 年 12 月、アメリカに出向き、シアトル熱中学園のオープンキャンパスで高岡をＰＲしたことは忘れられません。高岡熱中寺子屋が世界に羽ばたいた瞬間でした。



万葉小箱

平成 31 年前田代表が闘病の末お亡くなりになりました。彼は、寺子屋の代表だけでなく、講師、また全国の熱中小学校のロゴのデザイナーでもあり、熱中小学校に多大な貢献をされた大恩人です。後任には若い感覚で寺子屋を運営してくれる人がいいとの想いでした。皆さんが賛同して下さり、実際に高校教育の現場で実践されている荒井公浩さんに就任いただく事が出来ました。荒井さんは、寺子屋の授業を通じて行動に移す人を増やして、町の活性化に繋げたいと意気込んで下さいました。令和元年からは、場所が瑞龍寺から御旅屋セリオに移りました。その後コロナ禍もありましたが、荒井校長は、継続するためにいろいろ工夫しながら運営されています。「SDG`S」をはじめ、活動の範囲を広げ、一般の寺子に加え商工会議所青年部、協賛企業の社員さんをまきこんで、寺子の確保に尽力されたり、仕事をしている方が参加しやすいように、平日の夜に時間を変えたりされました。この間高岡でも 7 周年をお祝いしました。原点に帰り、瑞龍寺での記念講演には、レオス・キャピタルの創始者藤野英人氏にお願いし、御旅屋セリオで盛大に祝賀会を行いました。お祝いに来て下さった全国の関係者の皆様に、完成版の「万葉小箱」を披露できたことも思い出深いものになりました。私も今は一寺子として有意義に時間を過ごさせてもらっています。

寺子屋が開校してはや 10 年、この間、堀田代表や関係者の皆様には大変お世話になり心より御礼を申し上げます。寺子屋の卒業生が高岡のいろんな場で活躍しています。

昨年からは地震で被害を受けた能登の復興を願って「のと復興音楽ツアー」が高岡でキックオフし、能登 5 ヶ所で開催されました。高岡熱中寺子屋が能登復興支援のハブになって、能登の人達の元気に少しはお役に立てたように思います。



高岡熱中寺子屋の5年後からの挑戦

高岡熱中寺子屋初代事務局長
ばなな店主　開 洋子



高岡熱中寺子屋開校以来事務局長を務めながら、寺子屋の多種多様な幅広いジャンルの先生方による底知れぬ魅力的な授業に興味津々の学びの５年間が過ぎようとしたいた時。お役所仲間からは「こう言う補助金事業は成果が中々見えないんだよね。なのに、まだ存続して事業を継続させることの意味ってあるの？」の声が突き刺さた。役所に長く勤めている私も天に唾するように散々吐いてきた言葉だが言われるときつい。

それなら見える実績作りましょう。事務局長の任を解いてもらい新たな一歩に踏み出した。これだけ学んで実践してきたのに言われっぱなしは無いよ。これまでの人生の学びの蓄積を今役立たせないでどうする。

街の活性化に具体的に挑む目標ができた。内心もがいていても良い格好もしたい。「学びは楽しくワクワクがなきゃね。次に実践」と、カッコつける。

そして動き出した「お店屋さんごっこ」

やってみたい人この指止まれ！って事で、熱中寺子屋の発酵部を中心に集まったとんでもない女性達。意気込みと元気は有り余っている。

場所は高岡市の中心市街地に位置する元大和デパートが入居していた御旅屋セリオ７階の飲食店ブースの１０年以上使われていない空き店舗。

資金の確保をどうするか、何か補助メニューは無い？役所への問いかけに、「高岡市若手・女性商業者グループ支援事業費補助金」が良いのではと勧められ、県と市と事業主が３分の１づつ出してスタートできるプログラムにエントリー。書類を整えて、審査を経てそれぞれの補助額が上限 500 万円で合計 15,000,000 円の枠の中でと提案がされたが、老婆に無理は禁物と係る経費の圧縮をとことん計り総額 230 万円程での事業費で営業スタートに至った。勿論開店には、什器や備品などの購入以外は、寺子屋の先生をはじめ寺子、友人達の有形無形の愛とお金が注がれた。これも一重に熱中関係者の学びの効果とワクワク好きの方々のご厚意の賜物である。実際のばななの営業と言えば、スタッフの仕事に対する意識はまるでボランティア感覚の延長で実に緩い。不慣れな素人集団の最大の防御的スタートとなった。

調理師や栄養士等の資格を持ったスタッフは居るが、私を含めてお店の営業やサービスには全くの素人。これまで飲食業を経験した者がいなかった。誰一人１円を稼ぐことさえ理解していなかった。

それでも、救われたのはスタッフが真面目に取り組み、働くことの満足感と感謝される事の喜びの手ごたえを感じることができたからだと思う。

高岡熱中広場　Ba-Cafe Banana は人が集う場の意味で、後に口の悪いお客様が Banana は婆さん七人で始めたからだよ。が一人歩きし戸惑いながら私も喜んだ。

年々、ばななのランチは安心で安全で美味しい、しかも、コスパ最高！の高評価を得ることが出来るお店に育っていった。デパートが撤退した空き店舗での、私達の試みは５年間営業の目標を目指し、今年の ３ 月をもって閉店した。寺子屋で学んだ者達が牽引し、その取組は細やかだけどおばちゃん達の身の丈にあった運営方法で、街づくり・街の活性化に寄与できたと自負している。今でも道ですれ違う人たちから、ばなな再開して欲しいと嘆願される。まだまだ私にはやりたいことが順番をついて行列している。





とかち熱中小学校はヒントの宝庫

とかち熱中小学校 3 期生
ナレーター・声優
八所 かおり

十勝

私は鹿児島に生まれ、大阪で育ち、13 年間の東京生活を経て北海道へ移住し、現在は十勝管内の芽室町で暮らしています。職業はナレーター・声優で、移住後も変わらず活動を続けています。

2018 年、地域おこし協力隊として芽室町に着任しました。到着して 1 か月も経たないうちに、「この町は本当に素晴らしい。ずっとここにいたい」と強く思い、その後の 3 年間を協力隊として過ごしました。任期終了後は、移住・定住支援や職業紹介事業を行う NPO 法人 Qucurcus (ククルクス) を立ち上げ、地域に根ざした活動に取り組んでいます。

転機になった仲山進也先生の授業

熱中小学校で特に印象に残っている授業があります。それは、仲山進也先生 (楽天大学学長) による「ストレングス・ファインダー」をテーマとした講義でした。

ストレングス・ファインダーは、34 種類の資質から自分の“強み”を明らかにする診断ツールです。多くの性格診断が弱点や短所に目を向けがちな中、このテストは「強み」だけに焦点を当てています。得意なことは学びも成果も伸びやすく、結果として大きな幸せにつながる。仲山先生はそれを、実に具体的でわかりやすい表現で伝えてくださいました。

私の上位資質のひとつは「責任感」です。公式の説明文は抽象的でやや分かりづらいのですが、仲山先生はこう語りました。

「責任感が強い人は、“やると言ったことは必ずやる”のが当たり前。『できませんでした』は、本人にとっては理解できない状態です。自分で完結できる仕事を好み、責任を引き受けられない環境ではストレスが溜まりやすい。放置されると孤立しやすいため、任せたら放置ではなく、ほどよく伴走してあげると力を発揮します。」

この「強みあるある」の解説はどれも的確で、会場中が「わかる！」と湧き上がるほどでした。私自身、自分の資質の特徴がこれほど腑に落ちたことは初めてで、深い納得感を得ました。

また、自分の強みを知ること以上に、他者の強みを理解することが非常に重要だと気づきました。日常では「自分にとって当たり前にできることが他者にはできない」場面でイライラしてしまうことがあります。しかし、資質は人それぞれ。授業では全員がネームプレートに自分の上位資質を書いて可視化するため、「この人はこういう考え方をするのだ」と自然に理解が深まりました。その瞬間、「みんな違う」が頭ではなく“腹”に落ちたのです。

熱中小学校は“学びの交差点”

「自分の苦手は、誰かの得意。自分の得意は、誰かの助けになる。」

その気づきは、私にとって大きな転換点となりました。そして、これは熱中小学校という場の本質そのものです。年齢、経歴、価値観の異なる人たちが出会い、学び合う。全国で活躍する先生方から直接知識を得て、地域の中では得られない視野が開けていく。その積み重ねが、人生を豊かにし、挑戦を後押ししてくれるのだと感じます。

皆さんの前には、二つの選択肢があります。ひとつは、今の生活をそのまま維持すること。もうひとつは、熱中小学校に入学し、新しい学びとつながりの中に飛び込むこと。

半年ごとの学期制なので、合わなければやめればいい。けれど、一歩踏み出さなければ何も変わりません。



学びは、新しい挑戦のきっかけになります。挑戦は、自分を楽しくし、誰かを幸せにします。

これからも、熱中小学校が多くの方にとっての“人生の転換点”となることを願っています。



熱中小学校が後押しした 40 代からの挑戦

とかち熱中小学校 3 期生
Beer Bus On Your Side オーナー
松永 正宗

僕は「Beer Bus On Your Side」という、樽生クラフトビール専門のキッチンカーを運営しています。代表といっても、個人で営む小さなビール屋で、普段は「飲み屋の親父」のような感覚で仕事をしています。

クラフトビールのキッチンカーを始めたのは 6 年前です。5 種類の樽生ビールを同時に提供し、樽が空くたびに銘柄を入れ替えるスタイルです。朝来たお客さまが、昼・夜と再び立ち寄ると「お、ビール変わってるじゃん」と楽しんでいただけるようにしています。

僕はこの仕事を“移動式”のケータリングサービスと捉えており、焼肉、誕生日、親戚の集まりなど、さまざまな場に呼んでいただきながら、北海道各地を回ってきました。

新規就農の断念と病室で訪れた転機

この仕事を始めるまで、僕は「牛屋と飲み屋」しか経験していません。新得町の共働学舎でチーズ職人として働き、その後は放牧酪農で新規就農を目指し、毎日乳搾りをしていました。しかし、体調を崩し、新規就農は断念。「その体では無理だ」と言われて、入院することになります。絶望と迷いの中で天井を眺めていたとき、「ビール飲みたいな」と何気なく思ったことが転機でした。当時住んでいた新得町には、店舗になりそうな物件がほとんどなく、「家の前に一晩だけでいいから飲み屋が来ないかな」と、いつも思っていました。でも、そんなこと起こるわけがないと諦めていました。ところが、「車にビールを積んで行けばいいんじゃないか」。そうひらめいた瞬間が、ビアバスを始める最初のインスピレーションでした。



無名の自分を変えた熱中小学校との出会い

ただ、新得町に 4〜5 年住んでいても、僕はほとんど誰にも知られていない人間でした。「謎のおじさんがキッチンカー始めました」と言っても、誰も呼んでくれません。

人とつながれる場所はないかと探していた時、熱中小学校を見つけました。「いろんな人が集まるなら、ここしかない」と直感し、すぐに入学しました。

僕にとって、熱中小学校は“外の世界に戻る入口”のような場所でした。いろいろな仲間ができ、先生方の話からたくさんの刺激を受け、「40 歳からでも遅くない」「やってみればいいじゃないか」と背中を押されました。

国内でも例がほとんどない樽生ビールの移動ケータリング。お手本がないからこそ、正解も不正解も分からない。でも、「とりあえずやってみよう」という思いで挑戦しました。今振り返れば、この無謀さも含めて、とても楽しいスタートでした。

仲間に支えられて次のステージへ

おかげさまで、ビアバスは多くの方に応援いただき、営業を続けることができました。2024 年 2 月には、初代ビアバスのエンジンがついに壊れ、お別れすることになりました。

そこで、車両更新のためクラウドファンディングを始めたところ、開始 1 日半で目標額を達成。さらにネクストゴールも達成するなど、想像を超えるご支援をいただきました。本当にありがたい限りです。

熱中小学校に入っていなければ、今の僕はありません。仲間の存在、場の力、先生たちの言葉の後押し、その積み重ねが、僕の挑戦を前に進めてくれました。あのときの選択が、人生の大きな転機になったと確信しています。

これからも、クラフトビールを通じて、多くの人の“楽しい時間”に寄り添える存在でありたいと思います。



熱中小学校と私

とかち熱中小学校 1 期生
PonoWolves 株式会社代表取締役
加藤 拓



僕は十勝さらべつ校の一期生として卒業し、その後“鮭のように”再び十勝の熱中小学校に戻ってきました。コロナで卒業式に参加できなかったこともあり、僕の中では「熱中の時間」が一度止まっていました。
今回、当時を思い返しながら写真フォルダを紐解いていたら、まるで自分自身の「卒業アルバム」を編集しているような 1 週間でした。ここまで濃い時間を過ごせたことに、あらためて感謝しています。

熱中で出会った“ボーダーレスな仲間たち”

僕が入学したのは 36 歳のとき。いま 43 歳になりましたので、もう 7 年前になります。実は最初は山形県高畠校に通うつもりだったのですが、仙台勤務から突然の転勤で十勝へ。ちょうど十勝に熱中小学校が開校するというご縁をいただき、迷わず入学しました。
勉強とは無縁だった学生時代と違い、熱中では「頭がオーバーヒートする」ほどの刺激と学びの日々。年代も職業も地域も超えた仲間と出会い、「野遊び部」を立ち上げて釣り・山菜採り・キャンプを楽しんだり、自分より上の世代の方々と深い交流が生まれたり。大人になってから、こんなにボーダーレスな友達ができる場所は他にありません。
僕自身、もともとは農業機械メーカーのサラリーマンでしたが、熱中でのインプットと仲間との時間が積み重なり、ついに起業。現在は、妻と一緒に建築事務所を経営し、宿泊施設の運営を行いながら、農業ベンチャーの現場と人をつなぐ仕事にも携わっています。

十勝から全国へ広がった熱中の旅路

移住者だった僕にとって、十勝は最初「よそ者」感がありました。でも熱中小学校に入学したことで、自分の中に「第 2 のふるさと」が生まれたと感じています。性格は実はものすごくシャイなのですが、気づけば宮崎小林・熊本人吉・旭川江丹別へ…全国の熱中小学校にお邪魔する十勝でも屈指の図々しい「熱中渡り鳥」になっていました。実家のある仙台の両親を高畠校に連れて行けたことも、とても大切な思い出です。
そして、もう一つ忘れられないのは、高知県越知町の熱中小学校（スノーピークのキャンプフィールドが舞台）で、十勝の山井校長（初代）と一緒にキャンプができたこと。普通では起こらないような経験が、熱中では当たり前のように起こります。

熱中がくれた“最初の一歩”とその先へ

熱中で学んだのは、講義そのもの以上に、「最初の一歩を踏み出す勇気」でした。先生や仲間の言葉が背中を押し、「やるかやらないかは自分次第」という気づきをもらいました。今も挑戦を重ねている理由は、あのときの“火をつけられた瞬間”があったからだと思います。
いまの僕の肩書には、「焚き火マスター」という少し変わったものもあります。薪の組み方ひとつで炎の形が変わるように、集まる人の組み合わせによって場の姿はまったく変わります。これは二つとして同じものは存在しません。
全国の熱中小学校それぞれの魅力も、人と人の関わりから生まれてくる。そこが、熱中小学校の最大の強みなのかなと思っています。
またこうして十勝に戻ってきました。これからは、二度目の入学のつもりで、皆さんと一緒に学び、遊び、挑戦していきたいと思います。



熱中小学校で気づいた「きっかけ」づくり

とかち熱中小学校１期生
一般社団法人ドット道東 理事
野澤 一盛

僕が今日ここにいるのは、振り返ればすべて「熱中小学校で得たきっかけ」が積み重なってきたからだと感じてます。自分がなぜ今この仕事をし、どうして道東で活動しているのか、その始まりをたどっていくと、いつも熱中小学校に行き着きます。

悶々とした日々と熱中小学校との出会い

僕は京都で生まれ育ち、大学卒業後は東京勤務を経て、2011年に札幌へ転勤しました。その後、2016年に十勝へやってきました。移住前、札幌の知人からは「十勝って何もないよ、面白くないよ」とよく言われました。実際、移住直後の半年ほどは友人も少なく、人とのつながりもほとんどなく、「本当にこの地域は楽しくない」と思ってしまうような、悶々とする日々を過ごしていました。

そんな時に出会ったのが、2017年4月に更別村で開校するという「熱中小学校」のニュースです。ちょうど動画制作を学びたいタイミングだったこともあり、「これが何かのきっかけになるのでは」と思って入学しました。

実際、熱中小学校では多くのきっかけと出会いに恵まれました。最初に友人になったのは、当時22歳でフォトグラファーとして活躍していたサムエル君。写真が上達せず悩んでいた僕に、「こうしたらうまくなるよ」と丁寧に教えてくれたことがあり、翌日から写真も動画も一気に楽しくなりました。あの出会いがなければ、今のようにクリエイティブの仕事をすることはなかったと思います。

道東で“面白さ”を言語化する仕事へ

その後、僕は道東の魅力を伝えるため、自主出版でガイドブックを制作したり、動画・写真・ウェブを使った情報発信、企業や地域のブランディングに携わるようになりました。活動エリアは十勝を含む“道東”一帯で、その広さは九州に少し満たないほど。そんな広大な地域で、地域に眠る「面白い」を言語化し、伝える仕事を続けています。

この道に進むきっかけをくれたのは、まさに熱中小学校で出会った仲間たちが「一緒にやらないか」と声をかけてくれたことでした。

いまでは道東各地に点在する約100名のパートナーと一緒に、デザイナー、フォトグラファー、ライター、クリエイターなど多様なメンバーでプロジェクトチームを組み、広域の課題解決に挑んでいます。こうした人とのつながりは、熱中小学校に参加していなければ決して得られなかったものです。

あらためてこの7年を振り返ると本当に数えきれないほどのチャンスを熱中小学校からいただきました。

熱中が教えてくれた“ここにしかない面白さ”

授業後のBBQで、狩猟で獲れた鹿肉をその場で焼いてくれる人や、採れたての野菜を持ち寄る農家の方々と交流したことも強く記憶に残っています。札幌では経験できなかった驚くような「コトの体験」から、たくさんのヒントをもらいました。熱中小学校での感動体験が、今の僕の企画や情報発信の原点になっています。

僕は今、「理想を実現できる道東をつくる」というビジョンのもと活動しています。「道東だからできない」「十勝だから無理」と言って地域を離れる人も多いですが、本当は、この土地ならではの“面白さ”がたくさんあります。

最近では、道東にゆかりのある1,000人の「やりたいこと」を集めた本を制作したり、挑戦する人を応援し合うサービスを立ち上げたり、チャレンジが循環するコミュニティづくりに取り組んでいます。

こうした積み重ねを振り返ると、僕の人生の節目にはいつも熱中小学校の存在がありました。これからも、ここで得た学びとつながりを大切にしながら、挑戦を続けていきたいと思います。





熱中小学校で始まった僕の本当の“小学校”

とかち熱中小学校 5 期生
ToyToy屋 アイヌミュージシャン
＆デザイナー
小川 基



十勝

小学校 1 年生で始まった “地獄”

まずはどうしても避けられない「暗い話」から始めさせてください。僕は北海道で生まれ育ち、先住民族・アイヌの血を引いています。僕の地獄は、小学校 1 年生で始まりました。入学と同時に差別が始まったのです。

当時の僕は、自分がアイヌであるということもよく理解できていませんでした。ただ家では「お前はアイヌだ」と言われ、外へ出れば周りは日本人の子ばかり。1 年生の子どもが、その矛盾を理解できるはずがありません。

学校へ行けば、毎日「あ、犬だ」と言われる。自分が人間ではないような感覚でした。アイヌの人々に多い体毛の濃さもからかわれる理由になり、身体検査のたびに全身の毛を剃ってから登校しなければならないほどでした。それが親にバレれば家ではまた殴られ、学校にも家にも居場所がありませんでした。

唯一の救いはおばあちゃんのアイヌ文様

中学に入る頃には、身を守るために暴力に頼るようになり、進学もできず、すすきのへ流れ、チンピラのような生活をしていました。それでも僕には、ひとつの救いがありました。それは、アイヌのおばあちゃんから教わった「アイヌ文様」です。

アイヌの伝統的な口元の刺青（女性の成長の象徴）を入れていたおばあちゃんは、当時流行していた「口裂け女」と混同されて孫がいじめられるのを恐れ、ずっとマスクをして過ごしていました。そのおばあちゃんが僕を膝に乗せて文様を教えてくれた。あの時間があったから、僕は生きてこれたと思っています。

ずっと探していた “やり直しの小学校”

ある日、TEDxSapporo で「熱中小学校」を知りました。最初は「小学校？いい思い出ないし行きたくない」と思いました。でも、その言葉を聞いた瞬間、心の奥にずっとあった願いが動き出したんです。僕の夢は「小学生をやり直すことだった」。十勝に行けば、それが叶うかもしれない。そう思って入学しました。

入学式の日にはフラッシュバックが押し寄せ、泣きそうになりました。でも、先生も生徒も、僕をまるごと受け止めてくれた。僕の過去の傷を癒してくれたのは、熱中で出会った皆さんです。

僕の本当の「小学校」は、ここから始まったんです。そこから出会いが次々とつながっていきました。その中で生まれたのが、7 周年記念パーティーで披露する「とかち熱中ファッションショー」です。

きっかけは、DJ のピーター・バラカン先生の授業でした。授業後の懇親会で、十勝の生徒たちが音楽に合わせてモデルウォーキングの練習をしている姿を見て、「みんなで一緒にできること」を思いつきました。仲間と一緒にこういうことができるようになったことが、僕は本当に嬉しいんです。

そして今日も、札幌から十勝へ、朝 3 時に高速道路を走りながら考えました。「俺は今、何をしているんだろう？」と。でも答えはすぐに出た。みんなの顔が見たいからだ、と。僕は熱中小学校で初めて “小学生になれた”。
心からそう感じています。皆さん、出会ってくれて本当にありがとうございます。

※十勝の 5 名の原稿は、2024 年 5 月の「7 周年記念スピーチ」をもとに編集しています。

とくしま上板熱中小学校は、人生の生きがいです。

とくしま上板熱中小学校　中川 英子



こんにちは、私は「とくしま上板熱中小学校」第 1 期生の中川英子です。
2017 年 4 月に熱中小学校が開校し、友人からの紹介でよく分からないまま入学いたしました。
開校式では、「娯茶平」の阿波踊りに心奪われ、山田玲子先生の上板の郷土料理を使った料理に感動し、すぐに熱中小学校の魅力にハマってしまいました。
あれから 8 年が立ち、今も毎月の授業を楽しみに通っています。
これまで印象深かった授業は、大平まゆみ先生の「バイオリンコンサート」です。
「ストラディバリウス」というとても高価なバイオリンを持参していただき、本当にとても近くで聴かせていただきました。みんなが知っている曲を演奏してくれ、音楽を通じて感動を味わいました。

大平まゆみ先生の授業



1 期の授業ですが今でも覚えているほど、印象深い授業でした。
また、毎年踊り込みを行っている「阿波踊り」も、私が熱中小学校を続ける原動力です。
初期のころは、法被を自分たちで藍染し、娯茶平連の皆さんに阿波踊りの特訓をしていただきました。
今まで踊ったことはなかったのですが、詳しく教えていただき、今思えばとても貴重な時間でした。
着物の着付けも、みんなで動画や本で見て、一緒に練習して出来るようになりました。何とも想い出深いです。本番で大勢のお客様を前に踊る阿波踊りは、毎年ワクワクします。
陶芸も中里先生に来ていただき、近くでろくろを回すところを見れて、息をのむほどの静かな感動が胸に広がりました。今でも熱中小学校の課外活動として陶芸を続けております。
私たち上板熱中小学校は、若い方と関わることも多く、私自身も新しい刺激をいただいています。
ボランティア活動も多く行っており、イベント活動も楽しく参加させてもらっています。
わらあい市や、夏祭り・クリスマス会・餅つき・文化祭などのイベント時には、うどん・クッキー・お赤飯・カレーなどみんなで作り、地域の方に出しています。女性比率が高い上板の生徒さんは、料理好きの方も多く、毎回みんなで意見を出し合い楽しんで活動しています。

私にとっての熱中小学校は、年齢に関係なく、心がときめく場所です。何歳になっても、「楽しみたい」という想いは変わらないものですね。
これからも素晴らしい講師陣の授業・イベント活動など熱中小学校を通じた活動に出来る限り参加して、どんどん新しいことに挑戦していきたいと思っております。そして、いくつになっても自分の世界を広げて、楽しんでいきたいと思っています。

課外活動・陶芸の中里先生



とくしま上板熱中小学校で出会えた仲間

とくしま上板熱中小学校　原田 博子



大西さんと原田さん

私たちのスタートは、私が 8 期入学（2020 年 10 月～）、大西さんは 10 期入学（2021 年 10 月～）で、私が 1 年先輩でした。大西さんが入学した際に私が声をかけたことで意気投合しました。

その後、授業を受けたり、授業終了後の茶話会で話をするうちに、どんどん仲が深まり、現在は熱中小学校活動はもちろん、旅行などにも行くようになりました。

ここ、熱中小学校に来なければ出会うはずもなかった二人ですが、いつの間にか気が合う仲間へと変わっていく・・これが熱中小学校の醍醐味だと思います。

特に印象深かったのは、料理の実習です。山田玲子先生には、何度か上板に来てもらっていますが、新しい食材の組み合わせなど気づかなかった発見があり、とても楽しかったです。男性の生徒さんも三角巾をしてエプロンをして一緒に料理をする姿は、とても新鮮で少し面白かったです。意外と手際がよかったり、普段の座学の授業では話をする機会がないですが、料理実習は自然と話しができるいいきっかけとなりました。

また、最近では大西さんがやっている手話を、授業が始まる 30 分前に来てみんなに教えてくれるプチ講座も楽しみの一つです。挨拶や童謡を手話で表現できるようになり、私の趣味も増えました。

上板は研修旅行や課外活動も多く、これまで事務局の方に京都・高知・県南での DMV 体験・紀州和歌山熱中小学校・石垣島などいろんなところに連れて行ってもらいました。季節のおりには、みんなでハイキングや遍路路歩きにもよく行きます。

年齢を重ねるほど、「まだ動ける」ということが、どれほどありがたいことかを実感します。自分一人だったら行動力もないですが、熱中の仲間がいるからこそ、動ける力が湧いてきます。今後、全国の各熱中小学校さんも是非行ってみたいと、大西さんともよく話しています。

石垣島研修旅行



改めて、人生の後半にも、まだこんな素敵なご縁が待っていたことに、深い喜びを感じています。

もちろん、毎回の授業で来ていただく著名な講師の先生からは、貴重なお話を毎回聞かせてもらっています。授業で得た「学び」と、ここで出会った新しい仲間と過ごす時間が、日々を豊かにしてくれることに感謝しています。60 代を過ぎてからの出会いは、若い頃とはまた違う味わいがあり、熱中小学校で出会う講師先生や仲間との出会い、それら一つひとつの出会いが宝物のようです。

「7 歳の目でもう一度・・」が、今の私達ふたりの合言葉です。

山田玲子先生の授業



熱中小学校への想い

とくしま上板熱中小学校　平田 正志



平成 29 年 10 月 15 日、上板熱中小学校 1 期生の近所の友人に誘われて初めて参加した第 2 期入学式、大して緊張することもなく受講するところから熱中小学校との関わりがスタートしました。

そして初日の授業、民間月面探索チーム HAKUTO の中村貴裕先生の実機モデルを使っての講義に魅せられ、熱中小学校のグレードの高さに引き込まれてしまいました。

その後、課外活動で徳島が誇る藍の栽培から我が上板町が生産量日本一といわれる藍染めの染料となる蓼（すくも）作りの体験まで楽しい活動をしてまいりました。

その後令和元年には生徒を活動の中心にして、地域との交流を目指して、“わらあい市” と銘打ったイベントを月 1 回のペースで開催するようになりました。

本イベントは地元野菜の直売やフラワーアレンジのワークショップ、郷土料理の提供等熱中生が協力して行い、私は子供達を対象とした射的や輪投げ等縁日コーナーの担当として参加し楽しい時間を過ごさせて戴いております。





阿波踊り《熱中連》

また、ここ徳島県は言わずと知れた夏の風物詩、阿波踊りの本場でもあります。

上板熱中小学校では開校当初から生徒達で踊りのグループ《熱中連》を編成して夏の夜に徳島市内まで繰り出しております。当初は地元の有名連の指導の下、有名連に加わっての踊りでしたが、ここ数年は鳴り物部隊も自前で編成して、粗末ながらも（笑）

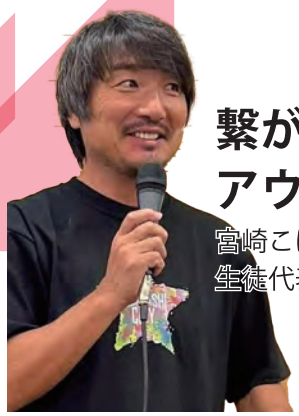
桟敷で観覧してくださっているお客さんと一緒に楽しんでおります。そして、最近は熱中小学校の他校の生徒さんにも参加して戴き、阿波踊りの熱気を体感してもらっています。

さて、本来の熱中小学校の授業についてですが、８年目に入りお招きする講師の選択肢が狭まり、近年は地元民放のアナウンサーなど身近で活躍されている方への依頼が増えており、今後の要請候補選出のため各メディアにアンテナを張っているところです。また地元の講師にあっては親近感も湧き、オープンスクールにすることにより、開校当初より半減した熱中生の新規入学者の増加に繋がればと思っています。

以上、現在半年に５～６回の座学中心の講義と、４～５回の“わらあい市”そして研修旅行という名の日帰り遠足やハイキングが活動の中心となっていますが、人員的にもパワー不足が否めない事務局を精一杯サポートして行きたいと思っています。

ボランティア





繋がりと学びのアウトプット

宮崎こばやし熱中小学校
生徒代表　藤原 和将

まず私と熱中小学校の出会いは、snow peak の山井社長が宮崎に講演に来る！とネットでたまたま見つけた情報からでした。このオープンスクール時の講師陣はヒューマンセントリックスの中村寛治先生・帯広コア専門学校の神山恵美子先生、そしてスノーピークの山井社長。山井社長の話を聞きに行っただけなのに、違う御二方の話に魅了され、こんな学びの場があるんだと感動し、即入学を決めました。入学したのが 2019 年 4 月。そこから本当に沢山の学びと出会い、繋がりができました。阿波踊り・ワインソムリエ・脚本家・茶道・大学教授・一流企業の社長… 普通に生活してたら絶対に出会う事のない方々ばかり。学生時代、全然勉強してなかった私。クラスでの席は一番後ろの一番端で居眠りしてた私。そんな私がこの熱中小学校では毎回必ず最前列のど真ん中に座り、前のめりになって聞いてるなんて… 。とにかく全ての授業が楽しくて、毎回ジャンルは違えど何か持ち帰るものはないかとワクワクしながら受講してます。熱中小学校。もう一つの魅力は人との出会い・繋がりです。講師の方はもちろん、世代を超えた生徒同士との繋がり、今では全国に熱中繋がりのネットワークができています。運動会協会の犬飼先生の授業をきっかけに参加させてもらった東京・お茶の水女子大学でのスポーツ共創人材育成ワークショップ合宿。その学びを元に小林市での熱中運動会の開催。その後、とかち熱中小学校の第 1 回さらべつ雪中運動会に参加する為に北海道までも行きました。とかち熱中小学校には 7 周年記念式典にも参加したり、熱中講師でもある北海道ホテルの林社長に会いに行ったりと頻繁に行くようになってます。2020 年には熊本県の豪雨災害が発生。ひとよしくま熱中小学校へ災害ボランティアとして駆けつけ、その後、復興した人吉にも足を運びました。山口県の萩・明倫館熱中小学校にも行きました。萩ではラジオパーソナリティーをしてる方が熱中の生徒さんで、その繋がりでラジオ出演させて頂いたり、松蔭神社の松下村塾を見て感化され、吉田松陰先生の本を読み出したり… そしてその時の講師がスポーツトレーナーの西澤 隆先生でした。西澤先生の話がすごく良くて、声を掛けさせてもらい宮崎こばやし熱中小学校にも来てもらう事にもなりました。色々エピソードがありすぎてキリがないのですが… 東京赤坂の懐石・辻留にも行けたし、更科堀井のそばも食べにも行けました。本当に熱中小学校の繋がりで沢山の経験をさせてもらってます。私は運動を通じて子どもの成長を支援する事を目的に、体育教室や放課後等デイサービスを運営する会社を経営しております。経営者として熱中小学校での学びを会社・職員に落とし込みたいと思いながら毎回受講しています。そして受講してる時、自分の中でひとつ決めていることがあります。それが質疑応答の際、必ず「質問」をする事。どんな内容の講演であろうと、自分との共通点を探し、何なら質問の内容を考えながら講演を聴いてる感じです。ただ聴いて関心するだけが勉強じゃないと思う。この学びをどう自分に取り入れて、次に活かせるかが大事。しかも質問すると講師に顔を覚えてもらえるし、講師も全く質問が出ない時間も面白くないだろうから嬉しいはず。講師の色々な引き出しを引かせまくったもん勝ちだと思いながら。聞いてるだけなら一方通行の YouTube とかで良い。自分の会社の会議・ミーティングとかでも質問や自分の意見を言い合える場になってもらいたいと思いながら。その質問タイムのおかげで、熱中講師の方々と親しくさせてもらいました。弊社の社員研修にも講師として来て頂いた事もありますし、授業で学んだ内容を自分なりに会社に落とし込み、社員研修も何度もしました。最後になりますが、私は横浜出身で 18 歳で大学入学を機に宮崎県に移住しました。友達なんて誰もいなかった状態から、今では住まいの宮崎市から 1 時間も離れた小林市でも沢山の友人が出来、更に全国にも熱中友達が沢山出来ました。そして、熱中小学校での学び。この熱中小学校での学びや発見が無ければ、私も会社もここまで成長出来てなかったんじゃないかと思います。本当に熱中小学校には感謝しかありません。今後ともどうぞよろしくお願いします。

「熱中食堂」が地域をつなぐ

宮崎こばやし熱中小学校 1 期生
窪谷 初恵





夫の故郷である小林市へ移住し、ちょうど熱中小学校が開校するとのことで一期生として入学し毎回の授業や遠足、課外活動を楽しみに継続して通っています。

何年か通うなかで学ぶだけではなく何か自分たちにできることはないのかと思いだした 2021 年 12 月、熱中小学校の忘年会の席上、急遽「子ども食堂」をやろういう話が持ち上がりました。熱中小学校の授業で学んだことを活かして何かをやりたいという思いがパチンと弾けました。

グラス片手に談笑している中で酔った勢い？で「熱中食堂」は誕生しました。

事務局の名称はＡＫＢ‘ｓ（小林の怪しい婆達）何の資格も持たない普通の主婦たちです。

資金もない器具もない…ないない状態からのスタートでした。

小林市へ申請を出して補助金を貰おう、営業をやめた食堂経営者から食器を分けてもらおう。開催は２カ月に一度、開催場所は駐車場の広い市の中心部にある交流スペースを借りよう。子どもだけでなく大人も利用できる地域食堂の形態にしよう。地元の食材を使って行事食も取り入れて季節を感じてもらえる献立にしよう。子供達のために「お楽しみ会」もしよう。食事は陶磁器やガラスの食器で提供しよう等々。会合を重ねて少しずつ形が見えてきました。

そして、2022 年 5 月「たけのこご飯・鶏の唐揚げたっぷり野菜添え・若竹汁・あくまき（小林のソウルフード 5 月の節句に食するちまき）・いちご」のメニューで第 1 回熱中食堂をオープンしました。

2023 年 4 月には熱中食堂 1 周年記念として、かつて熱中授業に講師でおみえいただいた上柿本シェフ、地元フランス料理店を経営する地井シェフそして小林西高等学校調理科の生徒さんとのコラボでフランス料理のランチを提供しました。

参加者の中には「初めてフランス料理食べたよ」「高校生が一生懸命に調理をする姿に明るい未来がみえる」などの感想もいただきました。

参加者からの会費・小林市からの補助金・地元の有志の方からの寄付金や食材の提供で何とか運営しています。毎回楽しみに参加される方、インスタを見てはじめて参加した、友達に教えてもらって家族できましたの声も多く聞きます。

開催前日は AKB’s で調理の準備をしますが、当日は調理・配膳・会場係と 10 名程のボランティアの方々の協力のもと運営しています。「美味しかったよ」「また来るね」の声を励みに頑張っています。

熱中でつながった仲間、色々な輪が広がり熱中での学びが私の人生を豊かにしてくれているのは間違いありません。学ぶことが次への一歩を踏みだすきっかけをくれる

Lifelong　Learners ！　生涯学び続けていきたいと思います。



紀州くちくまの熱中小学校と共に

紀州くちくまの熱中小学校２期生　立野 仁徳



化学品ホールディングス国内最大手のグループ会社で物流を担当した会社員時代、中国現地法人での新工場立ち上げにあたり物流業務責任者として駐在し、窓のない執務室で寝ずに何日目になるのか、今が昼か夜かも判らなくなるというモーレツサラリーマン生活…同世代と比較すれば年収は良かったが、全然幸せではなかった。精神が病んでいた。食事は砂を噛むように味気なく、朝起きれば滝のような汗をかいている…トラブルの報告が入る電話が鳴ることが嫌で仕方なかった。極め付けは、楽しそうに笑う２歳の我が子を見つめながら、顔は笑っているのに心が笑っていない自分をハッキリと感じた。「このままでは駄目だ」と強く思い、業務に追われるストレスの日々からなんとか業務を追い掛ける側に回った頃、自分の人生を生きようと肚に決めた。

会社を辞め串本へ移住してからは、とにかくやりたいこと、自分に回ってくる話を手当たり次第にやった。まずは重機の資格を取り、家のリフォーム、DIY、家屋解体作業、伐採、干物製造、素潜り漁、ニンニクの路地栽培、ゆずの果樹栽培、備長炭の製炭、養鶏、養蜂、狩猟（鳥獣解体）、水稲、青ネギの路地栽培、カヤックガイド、パラグライダータンデムパイロット、その他諸々、手伝いまで含めるとその業種幅たるや、思い返せば少し異常なほどだ。更には地域の柔道場のあとを取る事になり、中学生の（柔道）部活指導員となり、教育や地域農政など、様々な問題に立ち向かう手段として２０２５年４月には串本町議会議員に立候補、結果論だが興味の活動の中でいつの間にか沢山の方に関わっていただいたことが幸いし、望外の得票数にて移住者では唯一、しかも２番手で当選させていただいた。

縁もゆかりも無い、ただ一人の知り合いも居ない和歌山県串本町へ移住した私の“和歌山ライフ”はまさに熱中小学校と共に始まった。紀州くちくまの熱中小学校の第２期生として入学し、講師先生方や学びに来る方々、様々な出会いをいただき、同窓生の活動に感化され、また様々なアドバイスや激励をいただき、今現在も公私に渡りこの人脈が自分を支えてくれていることを実感する。





私らしく生きていいんだ

紀州くちくまの熱中小学校２期生
寺垣みち子 (通称うめこ)



私は耳と足に障害があり、
長年コミュニケーションを避けて生きてきました。
家業は梅農家でしたが梅が嫌いで、
梅と関わらないと決めて生きていました。
結婚後、子どもができない理由で婚家から戻され、
「障害 × 結婚 ×」という現実に生きる希望を失っていた頃、
第 2 次世界大戦の遺骨収集隊に参加。
慰霊祭で梅干しを供える場面に何度も出会い、
元兵士の方々から「梅干しの記憶が命をつないだ」と聞き、
梅への見方が変わりました。
帰国後、彼らが語ってくれた梅の力を残したいと思い、
無農薬栽培に挑戦しました。
最初は収穫量も品質も厳しく、
18 年目には「もうやめようか」と悩むほどでした。
そんな時に出会ったのが「くちくまの熱中小学校」。
全国から講師の先生方が来てくださり、
授業を通して自分の思考のフタが外れていく感覚を覚えました。
初めて人前で自分の人生や梅への想いを語り、泣きながら話したこともありました。
講師の先生から「もっと自分の言葉を発信してみよう」と背中を押され、
行動が変わりました。
わからないことは質問し、できない理由より「どうすればできるか」を考えるようになりました。
その結果、環境大臣賞を受賞し、融資を頂き経営を続ける事ができました。
田舎にいながら素晴らしい先生方に出会えた事、
学ぶ楽しさを知った事、そして「私も私らしく生きていいんだ」と
思えるようになった事に、心から感謝しています。



熱中の学びから、居場所作りへ

紀州くちくまの熱中小学校１期生　峯上 良平



学生時代の友人を過労自殺で亡くしました。
そのお姉さんが言いました。
「もし和歌山に帰っても大丈夫と思える居場所があったなら、将人は死ななかったかもしれない」
そんな居場所をつくりたい。でも、居場所って何だろう？
一年以上、何もできずに悩んでいた頃、私は熱中小学校に出会いました。
授業で勇気を出し、脇汗をかきながら質問したことを今も覚えています。
「居場所をつくりたい。どうしたらいいと思いますか？」
未熟な私に、先生方は知恵を授け、人をつないでくださいました。
同級生たちは仲間の働き先を紹介してくれました。
活動を続ける中で「峯上君は何をしたいのかわからない」「関わらない方がいい」と批判され、悔しさのあまり枕を濡らした夜もありました。
それでも諦めずにいられたのは、亡くなった将人の存在があったからです。
福祉の知識も、空き家を活用する経験もない“ないないづくし”の中で、
多くの先生方や仲間が私を信じ、支えてくれました。
おかげさまで現在はシェアハウス６軒、居場所１軒を運営し、
支援した方は 140 人を超えました。法人化や訪問看護ステーションの設立、不登校支援にも取り組んでいます。
熱中小学校に出会えたからこそ、何者でもなかった私が、ようやく「居場所」をつくることができました。
「できない理由を探すのではなく、どうやったらできるかを考える」
「できないのはやり方が悪いだけ。自分のせいにしてはいけない」
「100 回試せば答えが見えてくる」
先生方から学びました。
新しい学び、それを試す小さな勇気が、ワクワクを生み出します。
熱中小学校に関わる全ての方々に最大限の感謝を。
お読み頂き、ありがとうございました





大雪がつないだご縁

―「椿の森」と「とっとり琴浦熱中小学校」の出会いと、森の再生―

「椿の森」を後世に伝える会 代表
とっとり琴浦熱中小学校生徒
知久馬 梓

鳥取県琴浦町の静かな山あいに広がる「椿の森」。戦後間もない頃、農園として開墾され、野菜栽培やサツキ・ツツジの苗木づくりを経て、いつしか 800 種 2,000 本もの椿が咲き誇る森へと姿を変え、自然発生的に「椿の森」と呼ばれるようになりました。椿は、日本の伝統的な品種はもちろん、珍しい西洋ツバキ、この森でしか見られない貴重な品種もあります。さらに、樹齢 150 年のクスノキ並木やハンカチノキ、オオヤマレンゲ、希少な山野草が息づく、約 5ha の自然豊かな森です。

この椿園を築いたのは、私の義祖父母、加藤三良右衛門・智子夫妻。2 人が亡くなった後は、義両親が仕事の合間を縫って森を守り続けてきました。しかし 2020～2021 年の大雪は、森に深い傷跡を残します。多くの椿の枝が折れ、古木も倒れ、美しい景観は一変しました。

そんな折、倒木撤去に駆けつけてくださったのが「とっとり琴浦熱中小学校」の皆さんでした。雪解け後、折れた枝を運び出し、陽が差し込むように整えていく作業をともに続ける中で、次第に定期的な保全活動へと発展。やがて「椿の森ボランティア隊」が組織化され、毎月、樹木の剪定、枯れ木の伐倒や雑草の除去作業を続けてくださっています。

そして 2024 年 2 月、ボランティア隊の皆さんと両親に声をかけ、「椿の森を後世に伝える会」を発足しました。土地所有者、家族、地域のメンバーが一つになり、森を次の世代へつなぐ体制が整いました。所有者家族にとって、仲間の存在は何より心強く、保全のモチベーションを大きく押し上げてくれています。森は光を取り戻し、訪れる人の姿も徐々に増えてきました。

当団体の活動は保全作業だけにとどまりません。親子向けの自然観察会、大人向けのワークショップなど、森の魅力を体験できる企画を開催しています。夏の「昆虫観察会」では、カブトムシやクワガタなど 24 種類もの昆虫が見つかり、子どもたちの歓声が森に



響きました。椿の花びら染めやリースづくりに夢中になる大人の姿も印象的で、森は“学び・遊び・出会い”が生まれる場として変化しています。また、行政や社会福祉協議会が主催するお出かけサロンの受け入れも行い、高齢者の皆さんを森へ案内しています。自然の中で心がほどけ、笑顔が増える様子に、福祉と森の相性の良さを改めて感じています。

さらに 2025 年 3 月、初の「椿まつり」を開催すると、1,000 名を超える来場者が訪れました。メンバーが協力して駐車場整備や受付、森の案内を担当し、大盛況。これをきっかけに森の認知度が高まり、来園者は今も絶えません。

あの日の大雪は、森を確かに傷つけました。しかし、その被害がきっかけとなって熱中小学校との出会いが生まれ、多くの仲間が集まり、地域に新たな希望の灯がともりました。「椿の森」は、守られるだけの場所から、人が関わり合いながら育てていく“共につくる森”へと成長しています。

これからも琴浦熱中小学校との連携を大切に、地域の手で紡ぐ新しい観光地づくりへと挑戦を続けていきたいと考えています。これからの椿の森には、まだ描ききれない可能性が広がっています。四季折々の花を愛でに来る人、学びに訪れる子どもたち、森づくりに関わる仲間たち――その誰もが、この場所の未来を共につくる存在です。森が人を呼び、人が森を守り、楽しむ循環が続けば、椿の森は地域の誇りとして、静かに、確かに受け継がれていくでしょう。私たちはこの森とともに、ゆっくりと、豊かな未来へ歩んでいきます。



熱中仲間と実現したオペラコンサートの成功

とっとり琴浦熱中小学校生徒
松田 龍太郎・佐伯 恵美子

わが琴浦熱中小学校はこの度、開校７周年を迎え、記念事業として「琴浦オペラコンサート」を開催しました。全国の熱中小学校の皆さんや、琴浦町民、鳥取県民の皆さんにも呼びかけ、県立琴の浦高等特別支援学校の体育館２４０席を満杯にして、高揚の中で「オペラコンサート」を終えました。

ことの起こりは昨年８月の熱中授業。澤上篤人先生が２度目の授業でいらっしゃった時に「どうだ、琴浦でオペラやらないか。まず５０万円集めよう。集まったら君たちが真剣だと受け止める。そん時はやるよ、私は」と話されたのです。
こんな熱い挑発に乗らない手はありません（笑）。すぐに募金箱を作り、翌月の熱中授業から募金活動を開始しました。2 カ月間で 50 万円をクリアし、結局 110 万円以上の寄付金を皆さんから募ることができました。

その年の 12 月、さわかみオペラ芸術振興財団主催のオペラ「愛の妙薬」が徳島市で開催され、琴浦熱中小学校の数人の生徒仲間と一緒に鑑賞する機会を得ました。公演後のレセプションがすごかった。出演者（地元の人たちで結成した合唱団など）全員が檀上に上がって、ベルディ作曲の椿姫の第１楽章で演奏される有名な「乾杯の歌」をイタリア語で、とてもにこやかに大合唱されたのです。しかも暗譜で歌われたので、とても感慨深かった。この体験が琴浦オペラコンサート実現を心に強く深く刻んだのです。

今年の４月、澤上先生とテノール歌手の武井基治先生にお越しいただき、オペラ会場を選定する実地調査をしていただきました。地元琴浦町では 3 カ月以前の施設予約はできないことがわかり、結局鳥取県の施設である「琴の浦高等特別支援学校」の体育館を会場とすることになりました。

体育館での音響はまずまずで問題はありませんでしたが、多くの課題が見つかりました。土足厳禁なので履き替える必要がある。椅子の数も限度がある。トイレの数が極めて少ない。駐車場から会場まで 300 ㍍以上も離れている。県の施設なので手続きがとても面倒、などなど極めて不利な状況。他のホール施設とは大違いでした。

それでも、様々な工夫を凝らし、前へ前へと進みました。いつも周りには、何度も壁にぶち当たりながらも、へこたれずに邁進してきた熱中小学校の仲間がいました。



サイン入りチラシは私の宝物



「乾杯の歌」を何とか観客の前で歌いたい望みがあったので、毎週火曜日 30 分間、歌の練習を始めました。参加人数は少なかったですが、やる気は少しずつ広がっていきました。ユーチューブで適切な指導やカタカナの歌詞を見つけて、練習を続けました。直前には武井先生の直々の出張アドバイスがあって、見違えるように歌えるようになりました。プロの指導の素晴らしさを体験し、自信をつけることができました。

本番は 3 人のソリストと 4 人の器楽演奏家の素晴らしい演奏があり、アンコールの時に「乾杯の歌」を琴浦熱中小学校合唱団として一緒に歌いました。イタリア語の言語で歌うと、客席は一瞬に笑顔に変わったのです。歌い終わると、大拍手とともに全員によるスタンディングオベーション。熱中合唱団メンバーも笑顔になりました。この双方の感動は、約 40 年間各種コンサートの裏方をやってきた私にとっても初めての体験でした。

満杯の観客の半数を超える１３７名の方々がアンケートに応えてくださいました。なんと 93%の人が「大満足」の回答。熱のこもった感想文も書いていただきました。
「オペラは楽しいな、と思いました」「素晴らしい時を過ごせた。明日からの活力になる」「ブラボーを初めて大声で言ってみた」「結婚して５０年、金婚式を祝ってもらった気分になった」「子供たちに聞かせたい」「こんなコンサートを私共の宇都宮でもやってほしい」「料金も 2,000 円とびっくり安い」「出かけて良かったと心から思いました」「熱中生徒とのコラボレーション、最高でした」…。

熱中小学校の目指す方向が共有化され、みんなの力が集まると大きな成果を生み出せる。学び合う、協力し合う、自己成長をしようとする、この向上心の総合力が、難しいと思われた壁を乗り越えさせてくれた。地域の方々にも大変喜んでいただいた。

数日たった今も、あの日の支援学校体育館の、あの感動の中に引き戻され、胸がいっぱいになるのです。続く 8 周年、そして 10 周年もオペラコンサートを開催し、感動の輪を広げていきたいと思います。



歴史のまち「萩」で醸す“新しさ”

八千代酒造 蒲久美子さんの挑戦

【熱中小学校 10 周年記念誌 挑戦事例】



熱中小学校が掲げる「もういちど７歳の目で世界を」という言葉は、萩の伝統産業を担う生徒さんたちの挑戦の姿勢と深く共鳴しています。今回ご紹介するのは、八千代酒造の杜氏、蒲久美子さんです。蒲さんは、この熱中小学校 萩明倫館での学びを通じて、「伝統産業に革新の視点を取り込み、世界に通用する萩の酒を造る」という新たな挑戦を始められました。

熱中小学校 萩明倫館で得た「杜氏として欠けていた視点」

家業である酒造りの世界で、女性杜氏として技術を磨かれてきた蒲さん。伝統的な知識や技能は確かなものでしたが、熱中小学校の門を叩かれたことで「ビジネス」「マーケティング」といった、酒造りの外にある世界的な視点の重要性に気づかされたと言います。萩明倫館の授業は、経営戦略から最新技術、地域おこしに至るまで非常に多角的です。特に、「デジタル技術を活用した顧客との接点の持ち方」や「新たな市場を見つけるための思考法」を学ぶ授業は、伝統的な手法に頼りがちな酒造りの経営に、新しい風を吹き込むきっかけとなりました。

授業後に講師や県内外から集まる異業種の仲間たちと交わされる活発な議論は、常に真剣で熱気に満ちています。この交流が、蒲さんに「萩の日本酒が持つポテンシャル」を客観的に見つめ直す機会となったそうです。

熱中小学校 萩明倫館で「醸した」挑戦

熱中小学校 萩明倫館という舞台での学びと交流を原動力に、蒲さんが現在積極的に取り組まれている具体的で本質的な挑戦は、伝統に新たな視点を取り込むところから始まりました。

蒲さんが萩明倫館での多角的な学びを通じて習得された、異業種が持つ「市場の捉え方」や「伝達の視点」を、酒造りという伝統的な領域に持ち込むことです。長年の経験則に頼りがちな現場に対し、「なぜ、この製法なのか？」「どうすればこの価値が届くのか？」と問いかけるこの挑戦は、伝統を未来へ繋ぐための意識改革であり、八千代酒造が次の 100 年を見据えて取り組む本質的な取り組みとなっています。

萩明倫館のネットワークを活用したイベント事業

地元の水と米を使い、杜氏として細部にまでこだわった酒造りを実現されています。熱中小学校 萩明倫館のネットワークや仕組みを通じて、地元飲食店などと連携を強化し、萩の日本酒と料理の新しい体験を提供するなど様々な展開で萩を盛り上げています。

未来へ繋ぐ「新しい伝統」の創造

熱中小学校での挑戦は、家業を継ぐ者としての責任感を超え、「この萩という古都から、世界に通用する文化を創造する」という使命感へと変わりました。活気ある学びの場が、多くの挑戦を生み出す原動力であることに間違いありません。

これからも、蒲さんは伝統を重んじながらも「熱中」の火を絶やさず、新しい時代の「萩の伝統」を創造し続けていくことでしょう。

熱中小学校 萩明倫館生徒
蒲久美子さんが作られている
日本酒はこちらからご確認ください。
八千代酒造：https://ec.yachiyo-sake.com/

八千代酒造さんも指定されている
GI(地理的表示) 日本酒については
こちらからご確認ください。
GI 萩：https://hagi-gochi.jp/feature/gi-hagi



生徒たちがつないだ

“挑戦”と“再生”の物語

ちば銚子熱中小学校



その知らせが届いたのは、次期の講師の先生を誰にお願いしようかと話し合っていた、2023年 12 月のことでした。運営会社から突然「2024 年 3 月で閉校する」と伝えられ、当時の生徒会は動揺に包まれました。

――このまま終わらせていいのだろうか。

――このコミュニティを、どうにかしてつなげないか。

私たちはまず、生徒全員の思いを確かめようとアンケートを実施しました。その結果、約 8 割が「継続したい」と回答。しかし、続けたい気持ちと裏腹に、どうすれば続けられるのかは誰にも分からず、毎月集まっては議論を重ねる日々が始まりました。当時、病気で入院していた仲間からも「どうにかして続けたい」と強い思いが寄せられ、その声が背中を押しました。今も残る LINE の膨大なやり取りは、葛藤と希望の記録そのものです。

閉校が迫る 2024 年 1〜3 月の授業では、来てくださった先生方から「ここで終わってはだめだよ」と励ましの言葉をいただきました。3 月の最終授業の日には、他校の仲間たちも応援に駆けつけてくださり、「みんな応援しているよ、がんばれ」と声をかけられて、胸が熱くなりました。

2024 年 4 月。学校に通う日々が途切れ、私たちはチョウシ・チアーズ株式会社（銚子ビール）の佐久間快枝さんを訪ねて相談しました。

「続けた方がいい」

同席していた佐久間さんのご友人にも励まされ、行政との橋渡しも佐久間さんが担ってくださり、これまでの隔たりが少しずつ埋まっていきました。ビアカフェでの度重なる打ち合わせの中で、多くの人とつながり、佐久間さんの温かな人柄に触れ、「私たちの学校の “教頭先生” に」とお願いしたところ、その場で快く受けてくださったことは、今も忘れられません。

新しい学校をつくるにあたり、「名前をどうするか」「資金をどう集めるか」など多くの意見が出ましたが、最終的には「銚子という名前を残したい」という思いで一致し、「ちば銚子熱中小学校」を受け継ぐことに決めました。運営資金については、一人ひとりが覚悟を持って出し合うことになり、その瞬間、私たちの中に「本気でつくる」という決意が宿りました。

しかし、2024 年 6 月。新しい学校の中心となるはずだった大切な仲間が、闘病の末に旅立ちました。突然の別れに言葉を失いましたが、「彼の分まであきらめない」という思いが、私たちの心に強い火をともしました。

その想いを胸に、同年 7 月、決起集会兼、亡き友への献杯を行うため、坂尾英彦さん（のちに熱中小学校の講師にも）の古民家を訪れ、校長を引き受けてくださった小林富雄先生とともに、未来について語り合いました。（添付写真の仲間たち）

「自分たちで会社をつくるようなものだ。本当にできるのだろうか。」

そんな不安や葛藤がありながらも、「自分にできることを何かしたい」という仲間の思いが積み重なり、学校設立への道を一歩ずつ切り開いていきました。

そして 2024 年 10 月。法務局で一般社団法人の定款が認証され、ちば銚子熱中小学校を運営する新たな母体が誕生しました。

――「生徒みんなでつくる学校」が、ここに生まれた瞬間でした。

12 月には、記念すべき初のオープンスクールを開催。役割も手探りのままでしたが、一人ひとりが自分のやるべきことを見つけ、「自分たちの学校」として、2025 年 4 月に確かな船出を迎えることができました。

ちば銚子熱中小学校は、まだ始まったばかりの “再生” の物語の途上です。これからも互いに支え合いながら、仲間と共にこのコミュニティをで育てていきたいと思います。

（運営メンバー：元生徒会）
一般社団法人 代表理事：小島康治
理事：宮内友子、鎌形竜、伊藤勇一、小島妃佐子
監事：伊藤道郎
運営メンバー：﨑山華英、鯨岡紀子、伊藤史生、伊藤久美子、太田真弓、大柳光史、紙谷多喜恵、根本楊子、栗林貢、佐藤澄子、故・奥田貴志（順不同）



熱中小学校から生まれた婚活 AI ――つながりが未来を動かす。

高橋 恵美 × 河野 克典



白老

白老分校の教室で生まれた小さな会話が新しいプロジェクトを生むきっかけに。
ブライズイマージュ代表・髙橋恵美さんと、日本コミュニケーションアカデミー代表・河野克典さんが熱中小学校で出会い、互いの強みを持ち寄ることで誕生した AI 婚活ボット「オリビアっ子」は、AI でありながら人肌の温かさを持ち、24 時間相談者に寄り添う心強い存在だ。今回はお二人に「出会いの背景」「技術と実践知の融合」「これからの未来」について伺った。

■お二人のこれまでと、熱中小学校との出会いについて教えてください。

髙橋：
私はホテルのウェディングプランナーを経て、2011 年にブライダルプロデュース「ブライズイマージュ」を立ち上げました。結婚相談所の運営や婚活イベントを続ける中で、地域の方々の結婚をサポートすることが私にとっても幸せの時間だと感じています。
熱中小学校との縁は、現在も自宅のある山形県高畠町で第 1 校が誕生したことから始まっています。「大人がもう一度学び、つながる」そんな学校に強い親しみを感じていたところ、親の介護を機に白老へ単身 U ターンした際、徒歩圏内に白老分校があると知り、不思議なめぐり合わせに背中を押され「これはご縁だ」と入学を決めました。



河野：
私は長年、コミュニケーション技術の開発に携わってきました。熱中小学校に入学したのは 2023 年。30 年ぶりに故郷へ U ターンし、「地元の人と学び直しながら、新しい仕事をここから生み出したい」と思ったからです。地平線と水平線が見える白老に戻ってみると、景色も食も人もやわらかく、肩の力がすっと抜けました。リラックスできる場所だからこそ、仕事も暮らしも良い循環に入る――そんなモデルをこの土地から発信するのが、少し背伸びをした私の夢です。

■お二人が出会ったきっかけは？

髙橋：
始めて参加した授業で講師をされていたのが、白老分校の生徒でもある河野さんでした。山形での結婚相談所運営を継続しつつ、白老からも発信したいという思いを持っていた私の重要なビジネスパートナーへと発展しました。

河野：
懇親会での雑談がはじまりです（笑）。髙橋さんから「この地域は婚活が遅れている。どう打席を増やし、継続的に伴走できる体制をつくるか」という相談を受け、現場の課題が強く印象に残りました。

髙橋：
そこで河野さんが、「AI を使えば、24 時間の相談体制や不安の吸い上げができるかもしれない」とアイデアを返してくれたんです。私の 15 年以上の婚活支援の経験が技術と組み合わさることで新しい形ができる――そう感じました。

河野：
シンプルな会話だったのですが、あの瞬間に“第三の案”がふっと立ち上がったような気がします。



■AI 婚活チャットボット「オリビアっ子」はどのように生まれたのですか？

河野：

髙橋さんの“実践知”と、私の“AI 実装の技術”を組み合わせ、小さな実験を積み重ねてサービスを磨いていきました。ユーザーの悩みをどう拾うか、どんな言葉が安心につながるか。対話のパターンを丁寧に設計しながら、一緒に形にしていった感じです。

髙橋：

婚活の悩みは、夜中にふっと湧いてくることがよくあります。でも深夜に相談できる相手は少ない。そこで、現場で蓄積してきた私のノウハウをチャットボットに落とし込むことで、「いつでも頼れる存在」をつくりたいと思いました。誕生した「オリビアっ子」は、AI だからこそ“夜中でも遠慮なく聞ける”安心感があります。いつでも相談でき、言いづらかった悩みも拾える。24 時間会員様を支える仕組みとして事業の大きな強みとなっています。ボット内には私がパーソナリティを務めるコミュニティラジオ番組「オリビアの今ドキ！婚活 story」で培った言葉が蓄積され、ボット自体が学び続ける――地方でも最新テクノロジーを使い、サービス品質を更新していける実例です。

■熱中小学校という環境は、創造のプロセスにどのように影響しましたか？

河野：

熱中小学校の魅力は、「大人が 7 歳の気持ちで学び直す」ことにあります。雑談やワークの中で、異なる経験が交差し、予想もしない連携が生まれる。まさに私たちのプロジェクトがそうでした。

髙橋：

生徒の皆さんが本当に前向きで、とても刺激的な環境です。ここに身を置いているだけで、自分の成長意欲が高まります。膝を突き合わせて語り合う時間が、創造の原点になるんですよね。

■これからの展望を教えてください。

髙橋：

AI と人間のサポート力を併せ持つ、新しいかたちの結婚相談所として全国に発信していきたいと考えています。地方からでも質の高い婚活支援を届け、結婚を望む人々の背中を押し、最終的には少子化対策の一助になるような仕組みづくりに貢献していきたいです。

河野：

白老を拠点に全国へ届くサービスを丁寧に育てていきたいですね。学校の仲間と地域課題をテーマにしたワークショップや、対話を可視化するツールの開発にも挑みたいと思っています。熱中は「7 歳の気持ちで学び直す」場。ここでなら、夢を語って試すまでの距離が短い。「静かで強い事業」をみんなで形にしていけたらと思っています。

髙橋恵美（白老分校 11 期生）
白老町出身。関東・東北で地域の婚活支援にボランティアスタッフとして 15 年携わり、現在は結婚相談所ブライズイマージュ代表カウンセラーとして会員サポートと婚活イベントの企画運営を行うほか、FM とまこまいのパーソナリティとして「夕方 BayBay」「まちかど法律相談」「オリビアの今どき婚活 story」を担当し、地域と人をつなぐ情報発信にも取り組んでいる。

河野克典（白老分校 8 期生）
白老町出身。長く研究開発の現場でコミュニケーション技術に携わり、実装と検証を往復。
27 年間都内のメーカーに勤めた後、50 代で白老町に U ターンし起業する。
株式会社日本コミュニケーションアカデミー／CONTACTIVITY 代表、横浜国立大学つながり方研究所 所長・客員教授。





生徒から、生徒会長、教頭先生、そして校長先生になった話 －誰かの一歩を応援する－

熱中小学校丸森復興分校 校長　安部 信次

私が熱中小学校丸森復興分校に入学したのは、3 期からです。それまでは、名前を知っている程度でした。1 期から参加している知人から、話を聞き、誘われたりして、なんとなく入学したものの、その頃はコロナ禍でもあり、在宅で、ながら視聴する毎回でした。それが、養蜂部立ち上げの話になり、堀田さんが運転する乗用車で運んできたニホンミツバチが、私の家 (つぶら農園) にやって来ました。そして、養蜂部の活動報告をする必要があり、会場に行くようになりました。やがて、コロナの影響が縮小して、生の先生の授業を受けたり、他の生徒と様々な活動をする事が心地よい刺激になりました。

そして、第 7 期、2 代目生徒会長就任。司会を担当するなどします。次に、堀田さんからの推薦でシアトルジャパンフェアへ行く事になり、その 1 週間程前に急に教頭に就任することになったのが、2024 年 6 月。そして、2025 年 10 月より校長に就任しました。

あっという間にいろんな事があり、熱中はとにかくたくさんのきっかけを私に与えました。特にシアトルでの繋がりから、高畠、紀州くちくまの、白老など、全国の熱中小学校で授業をさせていただくようになってから、自分の中で大きな変化がありました。以前は「自分の地域のために何ができるか」を中心に考えていましたが、今は「地域と地域をどう繋げるか」「人と人が出会うことで何が生まれるか」という視点で物事を見るようになりました。





蜜箱と丸森はちみつ

丸森町での子育て支援、そしてアフリカ・ザンビアでの農業支援と、一見離れた活動にも共通点があります。それは「誰かの小さな一歩を応援するお手伝いをすること」です。熱中小学校での学びや活動も共通していると思います。講師の方たちや全国の仲間との出会いが、私自身の行動を後押しし、「自分の経験を誰かに渡す」機会をくれました。私自身が「学ぶ側」である事から、「伝える側」でもある立場へと変わってきました。これはとてもありがたい事で、より多くの学びをさせていただいています。

これからも、熱中小学校という“学びの輪”の一員として、丸森から全国へ、そして世界へ、少しずつ“つながり”を広げていけたらと思っています。



シアトルにて

阿武隈急行の復活の日、加成幸男さん制作の
'ガンバッペベンチ ' があぶくま駅に設置された





ガンバッペ　阿武急
ガンバッペ　丸森
ガンバッペ　日本

熱中小学校丸森復興分校 教頭　佐藤 君枝

2020 年 6 月、堀田さん（男性だけど?!）というコウノトリが、丸森の地に降り立ち〝熱中小学校丸森復興分校〟を産み落としてくれました。何も出来ない赤子を、高畠のお父さんお母さん達が見守り育ててくれ、よちよち歩きから早 5 年！やっと一人歩き出来るまでになりました（事務局が頑張ってくれています）。

令和元年の台風 19 号の甚大な被害のあと、何とも言い難い思いで過ごしていた時に目にした〝熱中小学校開校〟にすぐに飛びつき、「よくわからないけど、とにかく楽しそう！！」と入学、今 2 回目の卒業を迎えようとしています。

熱中小学校に入らなかったら、絶対に出会わなかったであろう素晴らしい講師陣の授業は刺激的で、自身の気持ちの高揚と同時に、「想いを形にしていけるところかも？」と思うようになりました。先生と生徒が、近しく仲良しになれるのもとても魅力的でした。

丸森は、二代目校長先生が阿武隈急行の社長さんという事もあり、『ボランティア部』があっという間に出来て、私は部長も務めました。丸森駅前の草刈り、あぶくま駅待合所やフェンスのペンキ塗りなどを行い、時には講師の方にもご参加いただき、靴や服に着いたペンキをお土産（?!）に帰っていただいたりも。楽しみながらのボランティア活動は、今期 12 期からは、二代目部長を中心に活動を継続していきます。部活動は、他に音楽部、養蜂部、図書部、登山部、マラソン部があり、授業以外での生徒同士の交流が盛んに行われています。そして今夏は、地域で行われなくなった盆踊りの復活を、地域の方々に呼びかけ大いに盛り上がりました。

さて、想いを形にするお話に戻しましょう！ 第 1 期の授業では、まきりか先生に来ていただき、〝校歌〟を作りました。たった 90 分でとても素敵なものに仕上がり、今も授業の際には、みんなで歌っています。

そんなまきりか先生との出会いから、「何か形にしたい！！」と、ずっと思っていた答えが出せました。昨年、古希を迎えた区切りに、孫に自分が作った歌をプレゼントしようと決めました。作詞作曲歌全てをまきりか先生にご指導いただき、CD を作りました。好きな歌を孫たちにプレゼントしたいという、自己満足ではありますが、孫達が歌ってくれている姿を見て、一歩踏み出せた自分を褒めたいし、そのきっかけを作ってくれた熱中小学校との出会いに感謝しかありません。一生の宝物になりました。それもこれも、堀田さんの想いを役場の八島大祐さんが受け止めてくれなかったら、熱中小学校開校は夢のまた夢、今の自分はなかったと言えます。その一歩があったから、どんなにか見る景色が、感じる心が広がったことか！ 感謝を胸に、7 歳の純粋な心で楽しく学び続けます。そして丸森復興分校は、〝ガンバッペ〟精神で、これからもみんなのつながりを大切に、地域が元気になる取り組みをしていきます。





ボランティア活動



熱中小学校での出会いから生まれたもの

熱中小学校丸森復興分校生徒
いなか道の駅やしまや店主
八島 哲郎

丸森

私は、宮城県にある熱中小学校丸森復興分校の生徒。そして「いなか道の駅やしまや」店主、八島哲郎と申します。私が熱中小学校で得た最大の財産は、「**出会い**」と、そこから生まれた「**挑戦**」です。ここでは、肩書きや年齢を超えて、様々な分野で活躍する一流の先生方や、志を共にする全国の熱意ある仲間たちと出会うことができました。

●運命の出会い、還暦デビュー

熱中小学校での出会いは、私の人生に新たな扉を開いてくれました。それは、「**音楽**」の道です。始まりは、2020 年 8 月 22 日、熱中小学校**丸森復興分校**の音楽の授業でした。講師は、数々の熱中小学校の校歌を手掛けられている音楽プロデューサーの**まきりか**先生です。まき先生は事前に生徒から校歌に入れたいフレーズを募集し、音楽の授業の **90 分間の間**に、生徒と共に一曲の校歌を作り上げてしまったのです。その即興性、そしてその素晴らしい才能に「こんな方がいるのか！」と心底驚き、感動しました。

そして 2022 年、まき先生が『誰でもプロの作詞家・作曲家になれる本』を出版されました。その購読特典の無料オンライン相談で、「**私にも曲が作れますか？**」と尋ねました。まき先生の「**作れます！**」の一言が、私の背中を強く押して下さいました。

その決意から生まれたのが、私の還暦デビューシングル「**郷土（さと）へ帰ろう**」です。作詞・作曲・歌を私が担当し、家族がコーラスを務めました。令和元年東日本台風の浸水被害を乗り越え、この丸森で覚悟を持って生きていくという強い想いを、歌とミュージックビデオに込めることができました。

● クラウドファンディングで書籍を出版

まきりか先生にプロデュースしていただき、クラウドファンディングで制作した書籍が『**お人持ちの法則**』です。この本には、令和元年東日本台風の甚大な浸水被害から、地域の皆さまや全国の仲間に助けられながら「いなか道の駅やしまや」を復活させた物語と、私ども八島家の歴史を綴っています。



●「マルモリサンバ」で丸森町を PR

書籍の出版を経て発表したセカンドシングルが「**マルモリ・サンバ！**」です。丸森町を元気にしたい！この曲のミュージックビデオ（MV）撮影は、丸森町全体を巻き込んだ一大プロジェクトとなりました。

熱中小学校の生徒さんや地域住民の皆さん、本当に多くの方が参加して下さいました。町の名所を巡りながらの撮影は、町おこしイベントのような熱気に包まれ、完成した MV は、丸森町の美しい自然や、そこに住む人々の温かさを感じることができ、町の PR に大きく貢献することができたと自負しています。

単なる学校の活動にとどまらず、地域を元気にするムーブメントを創り出す。これこそが、熱中小学校の掲げる「**教育による地域活性化**」の理想的な姿だと感じています。

● 10 年後の未来へ

熱中小学校は、単に知識を学ぶ場ではなく、「**何かを生み出す**」ための「**プラットフォーム**」です。アイデアとアイデア、人と人が出会い、化学反応を起こすことで、予想もしなかった新しい価値が生まれます。熱中小学校に入学して、人生が変わりました。感謝しています。





熱中小学校人吉校で芽生えた変化と挑戦

ひとよしくま熱中小学校
岩下兄弟株式会社代表取締役
社長　岩下 洋三

私は第６期より、法人枠２枠でひとよしくま熱中小学校に参加しています。経営者としての学びを深めると同時に、社員の自己啓発と社内活性化の場を作りたい。そう考えたのが参加のきっかけでした。
学びの場としての熱中小学校は、単なるセミナーや研修とはまったく異なる存在です。ここでは、人・知恵・情熱が交差し、新しい価値が生まれる。まさに“変化の起点”です。

全国各地から集う一流の講師陣による授業は、どれも刺激的です。ビジネスの最前線で活躍される方々、地域再生に挑むイノベーター、文化や教育の発信者。その多様な視点と実践の深さに、毎回圧倒されます。また、講師との距離が近く、授業後に直接意見を交わせるのも熱中の魅力。そこから得られるリアルな気づきや縁が、学びを超えて実際の“行動”へとつながっていきます。

そしてひとよしくま熱中小学校の学びは、焼酎が並ぶ懇親会・二次会まで続きます。“焼酎一貫校”の名にふさわしく、語り合いの中で生まれる本音と熱が、人と人をつなぎ、新しい挑戦を生み出しています。

実際、私の会社でも熱中を通じて具体的な成果が生まれています。これまでに５件以上のコンサルティング契約や、新しい仕入れルートの構築など、実際のビジネス取引が生まれました。講師や受講生との対話から始まったご縁が、会社の経営改革や新規事業の推進へとつながっています。その波は社内にも広がり、社員の意識が前向きに変化し、自ら学び行動する文化が育ちつつあります。熱中での学びが、会社に確かな“変化の風”を起こしているのです。

また、多様なバックグラウンドを持つ生徒たちとの交流も、かけがえのない財産です。参加者の属性は、経営者、クリエイター、農家、公務員、地域の若手リーダー、学生など多岐にわたります。年齢も職種も異なる人たちが、同じ机を並べて学び、語り合う。そこから得られる視点の広がりは、経営判断にも大きな影響を与えています。異なる価値観が交わることで、自分の中に新しい発想が芽生える。まさに「越境学習」の実践の場です。

法人としての参加は、社員育成の面でも非常に有意義です。実際に受講した社員は、講師の言葉や仲間の行動から強い刺激を受け、主体性や創造性を発揮するようになりました。会社としても「学びが利益を生む」という実感を持ち始めています。



さらに、地域とのつながりが深まったことも大きな収穫です。講師の方々が人吉・球磨の自然や文化、人の温かさに感動し、「また来たい」と言ってくださる。その声を聞くたびに、地元を誇りに思います。熱中を通じて、地域と企業、そして個人が共に成長していく未来を感じます。

この充実した学びの場が、これほど良心的な費用で提供されていることにも敬意を表したいと思います。熱中学園の理念と、運営スタッフ・地域ボランティアの方々の情熱があってこそ、これだけのクオリティが実現しているのだと感じます。

これからも私は、経営者として、そして一人の学び手として、熱中小学校を通じて人と知恵をつなぎ、地域と企業の未来を切り拓いていきたいと考えています。
「学びは、人と企業と地域を変える。」その実感を胸に、これからも熱中の精神で挑戦を続けていきます。

先生とのリアルな距離と私の夢

ひとよしくま熱中小学校
幼稚園教諭　小川 直穂



私にとって「熱中小学校」は、月に一度の都内研修。

熱中小学校では、人吉にいながら全国各地の様々なジャンルの講義を受講する事ができるのが最大の魅力である。企業家、音楽家、農業、あらゆるジャンルの講義を受講する事ができるのは、この熱中小学校以外ないのではないだろうか。きっと自分では選択する事がないからこそ、新しい扉が開かれ、発見と学びの連続が実に面白い。また、ひとつひとつの授業には、熱中小学校の事務局の方々の熱い想いが込められていることが、講師の方と事務局の方々との関係性からも伺え、受講する事でそれが納得に変わる。

日々、家事、育児、仕事に追われる私だが、月に一度、少しだけおしゃれをして、毎回、ちょっぴりドキドキしながら熱中小学校へ向かう。非日常の場に自分を置く事から始め２期から９期目を迎えた今は、どことなく自分の居場所となりつつあり、私にとって大切な「時間」。何よりも、「くまりば」の素敵な空間で、意識高い人たちに囲まれて講義を受ける時間は、自然と背筋が伸びる。今でも、最初に受講した日の事を鮮明に覚えている。緊張しながら会場へ向かうと、想像以上の受講者の方々の姿があり、更に緊張。そこには、「人吉をどぎゃんかしたか！」と熱い想いを持った方が、７歳のように輝いた瞳で、それぞれの強い意思を持って参加されていた。私は、一度上京し、地元に戻ってきたのだが、人吉に地元を愛する人がこんなにもいる事に大変驚いた。熱中小学校での、異業種の方との交流、意見交換は、専門職の私にとって貴重な出会いの場であり、仕事をする上でも相談、依頼など、この場で出会えたからこその有難い御縁となっている。また、第８期には、生徒代表挨拶という機会を頂き、幅広い年齢層、職種、大先輩の方々の前でのチャレンジは、心臓が飛び出るほどの緊張であったが、私にとって、大変貴重な経験となった。講義で得たマネジメントにおける考え方や、スキルを身に付ける事が出来た事で、確実に自分自身のスキルアップに繋がっている。そして、何より講師の方々のお話を聞く中で、自分が諦めかけていた「夢」をまた追いかけたいという思いが蘇る。講義の中では、講師の方の成功談、失敗談をありのままにリアルな距離で受け取る事ができる。失敗してもいい、何度でも立ち上がり、夢を追いかける事の素晴らしさを教えてもらう中で、勝手に「夢」に蓋をしていた自分自身を奮い立たせてくれる。なぜ、航空自衛隊から夜間学校に通い、幼稚園教諭に転職し、私はこの仕事をしているのか、何がしたかったのか…主婦の私でも、もう一度挑戦してもいいと思え、世界が広がり、人生の vision を導いてくれた「熱中小学校」に感謝しています。そう、人生はただ一度っきり！私もまだまだ輝きたい、誰かのために生きたい。

「熱中小学校で学んだ事を活かし、地域のために今現在出来る事を」

「それから12年後は海外で子どもたちのために活動している私でありたい」

「いつか体験談を語れる日が、熱中小学校卒業の日でありますように」



熱中小学校に参加して得られたこと

ひとよしくま熱中小学校
会社員　松原 恭平



熱中小学校との出会いは令和 2 年 7 月豪雨災害でした。約 2 か月間ボランティア活動を行う中で出会ったのが熱中小学校運営の祇園下さんでした。多くの方が被災し、ふるさと全体が深い悲しみの中にあった中で、「もう一度、人と人がつながり、共に前を向ける場所をつくりたい」という祇園下さんの想いに共感し、「地域の一員として何ができるのか」を学びたくて参加しました。

第一回の授業、私は新入生代表としてスピーチをさせていただきました。緊張の中で言葉を選びながら、ふるさとを離れて気づいた地域の良さ、そしてこの学びの場を通してふるさとの力になりたいという気持ちをお話させていただきました。あの日の拍手の温かさは、今でも忘れられません。

印象に残っている授業は、NHK のチーフプロデューサー倉崎憲さんの講義です。のちに映画化されることになったご自身の経験や今やるべきことに全力投球されているお話をお聞きしました。覚悟をもって仕事や社会課題に取り組んでいる方の「熱」を直接浴び、刺激をいただくことが出来る事が熱中小学校の魅力だと思います。

また、授業だけにとどまりません。授業後の「焼酎一貫校」と題した飲み会や部活動では、受講生や講師が垣根なく語り合い、笑い合いながら深い絆を育んでいます。老舗お茶屋の本格的「茶道部」や地域の歴史を歩きながら学ぶ遠足も部活動の魅力です。

地域の未来や文化について真剣に語り合う時間もあれば、何気ない会話から新しいアイデアが生まれることもあります。そうした“人と人とのつながり”こそが、熱中小学校の大きな力だと感じます。

この学びを通して、私は国宝・青井阿蘇神社の奉賛会に所属するようになりました。活動に関わる中で、地域の歴史や伝統に息づく人々の想いに触れ、「文化を守ることは、地域の心を守ること」だと強く実感しました。青井神社の行事に参加するたび、地域の人々の祈りや誇りが、今も確かに息づいていることを感じます。

熱中小学校での学びは、単なる知識の習得ではなく、「人とつながり、地域と共に生きる力」を育むものではないかと思います。異なる世代や職業の仲間と出会い、支え合いながら学ぶ時間は、私の人生にとってかけがえのないものです。

人吉球磨の復興はまだ道半ばですが、この学校を中心に生まれた学びとつながりの輪が、確実に地域を前へと動かしていくと思います。これからも私は、ここで得た仲間と共に、地域の文化と人の想いを未来へつなぐ一員として歩んでいきたいと思います。



自分にも出来ることがある。
ー地域のためのなんでも屋さんー

紀州かつらぎ熱中小学校 生徒会会長
なかたにファーム代表　中谷 和紀



自然と食が豊かな和歌山県で生まれ育ち、気がつけば 50 年が経ちました。春には色鮮やかな花が芽吹き、夏には蛍が舞い踊り、秋には柿やみかんが実り、冬には澄んだ空気の中に山々の輪郭がくっきりと浮かび上がる――そんな四季の表情豊かな土地が、私のふるさとです。

子どもの頃は、通学途中に地域のおばさんたちから「これ食べて行き」と柿やみかんをもらい、友達と頬張りながら歩いたものでした。その味はいまでも忘れられません。

しかし、あの頃お世話になったおばさんたちの畑の多くが、いまは耕作放棄され、荒地となってしまいました。人手不足や高齢化が進み、地域の景色が少しずつ変わっていくのを目の当たりにし、何とも言えない寂しさを感じていました。

そんな折、熱中小学校に参加し、たくさんの人たちと話す中で、地域の中にある「困りごと」を耳にするようになりました。庭の草刈りや木の剪定、雨どいの修理など、ほんの少しの手助けがあれば解決できるようなことばかりです。若いころに大工仕事をしていた経験があったこともあり、わたしにとっては、これらの作業はそんなに難しいことには感じませんでした。

しかし、今の時代、多くの人がサラリーマンとして事務職に就き、デスクワークには長けていても、外仕事や工具を扱う人は少なくなっています。地域の中で「なんでも屋さん」のような役割を担う人が減ってきているのが実情です。

そのとき、「自分にならできることがあるのではないか」と強く感じました。熱中小学校での出会いや対話から刺激を受け、本業の傍らで「なかたにファーム」という屋号を立ち上げることにしました。事業内容は、草刈り、剪定、簡単な大工仕事、そして農業です。特に地域の人たちが困っている草刈りや樹木の手入れなどに精力的に取り組んでいて、作業を終えたあとに「助かったわ」「きれいになったね」と笑顔で声をかけてもらえる瞬間が、何よりの励みとなっています。



農業の面では、地域の高齢者の方々が遠くのスーパーまで買い物に行くのが大変だという声を聞き、無人販売所を設けました。自分が育てた野菜や果物を手に取りやすい場所に置くことで、少しでも地域の暮らしを支えたいと思ったのです。最近では、子どもたちの食育にも関心を持つようになり、芋植えや芋掘り体験を通して、自然と触れ合う場をつくる活動も始めました。土に触れ、汗をかきながら笑顔になる子どもたちを見ていると、この地域の未来にはまだまだ希望があると感じます。

もちろん、地域には課題が山積しています。人口減少や高齢化、空き家や耕作放棄地の増加。一人の力で解決できるものではありません。それでも、熱中小学校で出会ったガンプ鈴木先生の言葉「Just For Fun」を胸に、楽しむ心を忘れずに自分に出来ることから取り組んでいきたいと思っています。楽しむことで人が集まり、笑顔が生まれ、少しずつ地域が動き出す。そんな循環をつくる一助になれたら、それが私にとって何よりの喜びです。

これからも、自然豊かな和歌山の地で、草を刈り、木を剪定し、土を耕しながら、地域の人たちと笑い合える日々を大切にしたいと思っています。そして、「なかたにファーム」が地域の笑顔を支える小さな拠点として育っていくことを願っています。

みやぎ美里熱中小学校について

みやぎ美里熱中小学校準備事務局　氏家 滉一



開校準備の経緯

みやぎ美里熱中小学校は、PFI 方式で新設された美里町立美里中学校を舞台に生まれました。学校整備に参画した「宮城美里 PFI パートナーズ」が、開校後も約 15 年にわたり地域活性にも関わるという座組のもと、“学びをまちにひらく” 挑戦が動き出しました。公教育の現場と民間の知恵、そして全国熱中ネットワークが肩を並べることで、教育施設を地域の知的インフラとして活用する、全国でも珍しいモデルを目指しています。PFI 事業で培われた維持管理のノウハウや地域コミュニケーションの仕組みを学びの場にも転用し、施設の質とプログラムの質を両輪で高めていくのが私たちの持ち味です。

学校の特徴

私たちの合言葉は「多世代共生でもういちど、7 歳の目で世界を。」

食・音楽・地域ビジネスの三つの柱を設け、参加者が実践や交流を通じて新たな挑戦に踏み出せる学びを提供します。校長には地元企業の代表・引地豊さん、教頭にはサックス奏者の名雪祥代さんが就任し、体験と対話を軸にした実践型プログラムを設計中です。

現役中学校のホールや美里町内の遊休施設を休日に開放し、世代や分野を越えて出会いが生まれる構成を考えています。安全管理や施設運用は教育委員会と連携し、土足・動線・駐車場など現役校ならではの配慮を標準化していきます。

第 1 回オープンスクールの様子

2025 年 11 月 1 日、美里町立美里中学校のホールにて第 1 回オープンスクールが開催されました。特別講師としておなじみ若宮正子さん（まーちゃん）と熱中学園理事の岡田慶子さんが登壇し、それぞれの視点から学びの重要性や地域とのつながりについて語ってくださいました。定員 100 名のところ町内外から幅広い世代の参加者が集い、会場はほぼ満席の大盛況。公開授業形式で参加者同士が “もう一度学びたい！” という熱気を共有し、大いに盛り上がりました。

今後の展望

そして 2026 年 4 月 4 日、本開校へ。月例の講義と課外授業を組み合わせ、地元の人材と全国の先生が交差する“学びの交差点”を育てます。PFI パートナーズ、教育委員会、町内外の企業・団体と協働し、講師相互派遣や協賛・寄付、奨学制度の整備を進めます。

地域に眠る資源を学びのテーマに変え、挑戦する大人と子どもが並走する——そんな風景を、美里から全国へ発信していきます。運営は地域ボランティアと事務局の小さなチームから始め、アンケートやデータをもとに改善を回す“進化する学校”を目指します。





「食の熱中小学校」米国シアトルツアー報告

食の熱中小学校　三上 直子

今回のツアーは、シアトル熱中小学校が 2019 年の設立から 7 周年を迎えることを記念して企画されたもので、食の熱中小学校としては初となる海外開催でした。シアトル熱中小学校の清水楡華校長が自ら企画・引率いただき、「食」をキーワードにシアトルの自然や街並みを巡り、現地の生徒さんやワシントン州日米協会のイベントでの交流を通して、食文化を学習することが目的です。私たちがシアトルを訪れた時期は、ワシントン湖の紅葉が美しく、すでに秋が深まりつつある時期でした。

1. シアトルでの食体験

シアトルは湖・海・山の豊かな自然の恵みを活かした食文化が印象的でした。初日のウェルカムパーティでは、地元の新鮮な魚を使った握り寿司や、松茸のスライスを添えたローストビーフなど、アメリカのケータリング文化の充実ぶりに圧倒されました。シェフは日本からシアトルへ移住された方で、主にケータリング業で活躍されているそうです。

清水校長のお計らいで、最終日のディナーはビル・ゲイツ氏も会員であるという名門ゴルフ場のクラブハウスにて、伝統を感じる素晴らしい雰囲気の中、豪快なステーキをビールや赤ワインとともにいただきました。味はどれも絶品。また、久しぶりに味わった本場のハンバーガーやクラムチャウダー、マカロニチーズは、10 代の頃憧れたアメリカの味がそのままで、心もお腹も満たされました。

2. 食文化の融合について

日米協会のパーティでは、柏原先生がガストロノミーツーリズムについて講演され、お食事は、シアトルのレストラン 2 店からシェフが腕を振るった料理をご披露いただきました。お一人は日本人のシェフで、昆布締めのお刺身や、白味噌と酒粕で味付けした鱈のソテーなど、和と洋が絶妙に融合したお料理に舌鼓をうちました。翌日の日米協会のファミリーデーでは、山田先生による講演を拝聴し、「食育」についてのプレゼンテーションや「だし」の比較など、シアトルでの食文化への深い造詣と愛情に触れることができました。

そして、清水校長おすすめのチョコレート店「Fran' s」を訪問。手作りの繊細なチョコレートは雑味がなくなめらかな口どけで、日本の老舗・和田萬の黒胡麻ペーストを使用したチョコレートもあり、ここでも日米の融合を強く感じました。

3.「食」を通じて人を知る

今回の旅を企画くださった清水校長は、1999 年にベルビュー市でベルビュー・チルドレンズ・アカデミーを創設され、現在では幼稚園から高校 3 年生まで 1,200 名が学ぶ、ワシントン州最大規模の私立学校へと育て上げられたパワーウーマン。その後、学校を英国の教育会社へ売却され、現在はアドバイザーとして活躍されています。また、ワシントン州日米協会の会長として毎年シアトルで開催される Japan Fair の開催にも尽力、日本からも熱中小学校のメンバーが多数参加されたとうかがいました。このように多忙な中でも、今回のツアーの企画から同行、出発の日の朝には手作りの朝食をご自宅でおもてなしてくださる温かく豊かなお人柄に触れ、とても感動しました。

シアトル熱中小学校メンバーや日米協会で知り合った方々との交流をつうじて、日本人がシアトルで様々な分野で活躍し頑張っていらっしゃる姿にとても刺激を受け視野が広がりました。

4. 最後に

食の熱中小学校に入学して 2 年目となりますが、この大人の学び場で、これからも7歳の目を持って、さらに世界を広げて行きたいと思います。

食文化への好奇心とリスペクトを共有できるメンバーと旅を共にし、豊かで実りある時間をいただいたことについて、企画・引率をしてくださった皆様に改めてお礼を申し上げます。またシアトルにうかがいたいです！



「食の熱中小学校」からの学び

食の熱中小学校　黛 哲也



食の熱中小学校

４期から食の熱中小学校に通いはじめた新人なので、まだ日が浅いが、すでに“食の視点そのものがごっそりアップデートされた” と実感している。

もともと趣味の世界でワインが大好き。最近は北海道余市町を中心に日本ワインの産地に通い倒し、その魅力にドはまりしている。幸せなことに、その延長で好きが仕事に結びつき、本業の旅行業でも徐々にワインや食の分野でのかかわりが増え、イベントやツアーで食の現場にはそれなりに触れてきた。けれど、「食の熱中小学校」の講義で講師の生産者や食のキーマンが発するリアルな言葉は毎度毎度グサリと刺さるし、熱量がまっすぐ飛んでくる。毎回の講義から影響を受けまくっている。



その“刺さる体験”が、私の本業である旅行業にも直球で効いてきた。これまでツアーづくりの定説だった “どこに行き”“何を食べるか”を目的とした、ただ「おいしい」を提供するだけではなく、「おいしいの裏側、おいしいのその先」を含んだストーリーの提供へのシフトが必要なことを痛感している。

熱中小学校での座学＋現地ツアーの学びに参加して「これこそガストロノミーツーリズムの本質だ」と腑に落ちた感覚があった。やはり進むべきはこの方向なのだと。

思い返せば、大好きなワイナリーを訪れて、畑を眺めながら聞く生産者の話は、ボトルに書かれた“テクニカルな情報”とはまったく別の心に刺さる感覚を提供してくれる。なぜこの土地でワイン造りに賭けたのか、厳しい自然との日々の対峙、土壌の特性、品種の選定、温暖化の恐怖、病害虫・鳥獣害の影響、一発勝負の仕込みの緊張感、うまくいかなかった年の悔しさ、そして未来への挑戦、譲れないこだわり。その場で聞くと、ワインはただの飲み物ではなくなる。大事な農産物であり、その生産者の個性と熱量をまるごと含んだ人生ごと味わうものになる。少し襟を正して、愛おしく大事に味わおうと思うのだ。

「食の熱中小学校」での授業は、まさに原点回帰のようで、「私が伝えたいのはこれだ」と背中を押された気持ちになった。

授業で話を聞くと、「この人の現場を見に行きたい」「この味の背景をもっと知りたい」という衝動が止まらない。その “自分が動きたくなる感情” が、ガストロノミーツーリズムの原点だと感じている。楽しく学びながら、それが仕事にも生きる。「食の熱中小学校」はなんて素敵な場だ。これから本業でもガストロノミーツーリズムの商品展開に注力し、仕事も趣味も境目がなくなるくらい、この世界にのめり込みたい。皆様も「おいしいの裏側、おいしいのその先」を求めて、一緒に旅に出ましょう！



熱中小学校の能登半島支援プログラム

能登の未来は、日本の未来

一般社団法人熱中学園の能登支援プログラムは、以下の3つからなります。

能登の「創造的復興」は能登の皆様と共に学び、共に生きるという姿勢はいずれのプログラムでも変わりません。

1. 能登復興音楽ツアー「のと・おん」
2025年2月-9月までに5つの自治体と大阪・関西万博の招待演奏、計6回にわたって「天地人」との共演で実施しました。音楽や能登の伝統文化を愛する中学生、高校生、大人の演奏者の皆様は延べ約400人になりました。

2. のと熱中授業
2025年4月-2026年3月まで能登の産業、文化を取り上げ、12回の授業を行います。
地元の担い手の方々を熱中小学校の先生が訪ねて授業にしました。ネットで無料公開しています。能登を忘れないーがテーマです。熱中小学校の授業とクロッシング（共同開催）を行います。

3. 食の熱中小学校
授業に能登の食に関する講師を招聘し、能登の食材で懇親会を開催し、来年４月には能登半島を訪ねる食の旅を企画しています。

のと・おん



食の熱中小学校 今後の予定

能登への食熱ツアー V
①4/9→10(木金)2026
「一本杉川嶋」で川嶋シェフのフルコースを味わう

のと熱中授業 今後の予定

のと熱中授業⑪ 1/17(土)2026
丸森復興分校とcrossing T
吉澤武彦
被災地の足を確保せよ！
カーシェアの活動報告

のと熱中授業⑫ 3/7(土)2026
ちば銚子熱中小学校とcrossing
松浦真弓
能登を醸す U

食の熱中小学校　noto.on のと復興音楽ツアー　noto.necchu class のと熱中授業

2025 1月
食の熱中小学校(第3期授業4) 1/25
川嶋亨(一本杉川嶋 店主) A
食を通して地域と共に歩む



2月
のと・おん①能登町 2/9
Soul & Beat TEN-CHI-JIN
ウインド・オーケストラのと D

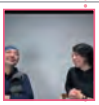




のと・おん②七尾市 2/11
Soul & Beat TEN-CHI-JIN
七尾太鼓スペシャルコラボチーム E

3月


のと・おん③珠洲市 3/16 F
Soul & Beat TEN-CHI-JIN
珠洲児童コーラス ティンクルベル & のとキッズコーラス
珠洲市民合唱団 珠洲フラウエンコール
秋吉ママレモンズ すずカルテット OBKトリオ
緑丘中学校吹奏楽部 飯田高等学校吹奏楽部 すず吹奏楽団

4月


のと熱中授業① 4/15 J
立花貴・山本亮
能登の未来は、日本の未来

5月


のと・おん④輪島市 5/18
Soul & Beat TEN-CHI-JIN
高州太鼓・虎之助 G



のと熱中授業② 5/26 -- 6/30 K
JIRO OMA
のと・おんふり返り YouTube配信

食の熱中小学校(第4期授業2) 5/28
高 利充(NOTO高農園 社長) B
能登から見える お店の風景

6月




のと熱中授業③ 6/8
鳥居正子・白藤菜都未・山田玲子 L
花嫁のれんを料理する--能登の食材紹介と伝統料理

7月


のと熱中授業④ 7/12
原田英男・平林将・西出穣 M
再び、牛と興す、能登

8月


のと熱中授業⑤ 8/6 N
まきりか
祭りは日本を救う--能登・キリコ祭りを取材して



のと・おん大阪・関西万博 8/23 H
Soul & Beat TEN-CHI-JIN
能登DREAM DRUMMERS
のと・おん吹奏楽団

9月


のと・おん⑤門前町 9/21 I
Soul & Beat TEN-CHI-JIN
門前中学校・門前高等学校合同吹奏楽部
櫛比太鼓チーム・本市獅子舞保存会



のと熱中授業⑥ 9/27 O
丸森復興分校とcrossing
萩のゆき・安部信次
能登の里山で暮らしをデザインしてみた

10月
食の熱中小学校(第5期授業1) 10/29
浅野大介(石川県副知事)
能登の農業の未来と循環 C

のと熱中授業⑦ 10/29 P
食の熱中小学校とcrossing
浅野大介
能登半島のこれからの農業

11月




のと熱中授業⑧ 11/15
丸森復興分校とcrossing
岡田翔太郎・丸谷芳正 Q
能登・七尾 伝統的・歴史的建造物の街並み保存継承

12月


のと熱中授業⑨12/13 R
熱中小学校白老分校とcrossing
南谷良枝・蒲原亮平・堀田一芙
能登の漁業の今と今後



のと熱中授業⑩ 12/20 S
丸森復興分校とcrossing
桐本泰一・開沼博
輪島塗の今とこれから

敬称は略させていただきます。

のと復興音楽ツアー

地元での音楽共演を通じ創造的復興を考える。

「のと復興音楽ツアー」は2025年2月9日(日)の能登町、2月11日(火祝)の七尾市、3月16日(日)の珠洲市、5月18日(日)の輪島市、9月21日(日)に輪島市の中で大本山総持祖院がある輪島市門前町を追加して合計5自治体で実施した。
8月23日(土)には大阪・関西万博での発表の機会を得ることができ、これまで実施した能登町、七尾市、珠洲市の3つのグループ122人を万博に招待して内外に発表する報告会を行った。

能登半島地震からの「創造的な復興」は、地元の人達の踏ん張りと、新たに文化や産業を継承する若者、移住者や関係人口の増加によるもので、その創造的な行動力は‘人の熱量’に依存する、と考えていた。しかしながら、個人個人がそれぞれ独自の被災体験を持ち、生活の方針が揺らいでいる中では、それほど単純な話ではなかった。それでも、「天地人」というプロとの共演の為に費やした練習の中から沢山の若い人たちが新しい一歩を初めていただいたと感じるツアーになりました。

のと・おん

第一回能登町での挨拶から

■主催者挨拶

一般社団法人熱中学園代表理事　堀田一芙



皆様こんにちは。本日は沢山の皆様のご来場ありがとうございます。
地元の音楽愛好家の皆さまと「天地人」がコラボする「のと復興音楽ツアー」‘のと・おん’の第1回目を、ここ能登町から始めることができました。
引き続き、七尾市、珠洲市、輪島市で行っていく、今日はそのスタートです。
本日は石川県、能登町、能登町教育委員会様の後援、株式会社内田洋行様の協賛をいただき開催の運びとなり、厚く御礼申し上げます。
地元の吹奏楽団「ウインド・オーケストラのと」は、中学生、高校生そしてOBの大人の皆様が一緒に演奏されるという大変ユニークな楽団で、本日の演奏が楽しみです。
「天地人」は東日本大震災以降、ずっと被災地を回ってきました。
私はその活動から、音楽には失われた命や貴重な時間から心を切り替える力があると信じています。
最後に、能都中学の職員、関係者の皆様、雪の中の準備、大変ありがとうございました。昨年の9月に打ち合わせのためにこの体育館を見せていただいた際に、ここに掲げてある校歌を見て思ったのは、学校の体育館は災害時に避難所としての機能がありますが、そこには校歌という音楽が共にある、ということでした。
私は個人的には能都中学校の校歌の3番の詩が好きですので、それを披露してご挨拶といたします。

はつらつと　英気は溢れ
日本海　汐満つところ
新たなる　文化を築き
郷土の　明日を担う
おお伝統の　われらが母校
能都中学に　栄えあり

ありがとうございました。

■来賓挨拶　石川県副知事　浅野大介



皆様こんにちは。石川県の副知事をしております浅野と申します。本日はこのように第1回のと復興音楽ツアーがこの場所で盛大に開催されますことを心よりお慶びを申し上げます。
音楽といえば、私も小学校の時、もう40数年前なんですけれどもブラスバンドにおりまして、トロンボーンを4年間吹いていました。こうやって楽団の皆で演奏することの楽しさは知ってるんですけれども、この‘ウインド・オーケストラのと’の皆さんは3つの中学校と、能都高校と、そして地元大人の皆さんが集まって音を奏でる。そんな皆さんと、今回は「天地人」という本当にプロのミュージシャンの方、そういった方々が一緒にセッションする、音を奏でる。そんな機会がここを起点にしてこれから能登のあちこちで続いていく、本当に能登の復興に祈りを込めて音を奏でてくださるのを楽しみに、私もちょっと今日は娘も妻も連れてお邪魔をすることにいたしました。私も日々金沢と能登の間を往復してるんですけれども、能登の地元の皆さんがこれから一つ一つ生活を立て直していく、そしてその未来を描く、その活動に何か大事なものあるな、何かが必要だよなって、来るたびに思ってたんですけど、あ、音楽が必要だったんだなと気づきました。
私、この内浦の海から向こう岸をのぞむ雄大なこの光景が好きなんですけど、これって楽器が奏でる音色と本当にマッチしますよね。そんな風景がこの場所にあって、それを土台にしてこの町、能登全体により一層多くの人が訪れるような、また違う段階を目指して復興に向かう、その道のりを私たちも一緒に走っていきたいと思っています。今日は本当に中学生、高校生の皆さんも頑張ってくださる演奏を楽しみに聞かせていただきたいと思っております。
最後になりましたけれどもこのような素晴らしい音楽ツアーを準備をいただきました一般社団法人熱中学園、そして一緒にご出演いただきます「天地人」の皆様、協賛いただきました株式会社内田洋行様、そのほか関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。ある意味長いツアーの始まりが今日だということですので、引き続きよろしくお願いいたします。皆様のますますのご発展を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

■クロージング挨拶

株式会社内田洋行代表取締役社長
一般社団法人熱中学園理事　大久保昇



ウィンドオーケストラの皆さん、それから「天地人の」大間ジローさんと黒沢博幸さん、本日は大雪の中本当にありがとうございました。
このたび株式会社内田洋行は、一般社団法人熱中学園主催の「のと復興音楽ツアー」に創立115周年記念行事として協賛いたしましたが、能登には少なからずご縁がございます。
当社は日露戦争後に創設された満鉄の社員が独立し、測量と製図の機器を満鉄に提供する会社として115年前に創業しました。今ではIT関連の売上が7割を占めますが、そのITのスタートは1962年に遡ります。創業者の義弟であった金沢出身の会長に、河北郡で起業されたコンピューター開発会社への出資と経営の依頼があり、当社の傘下になったことです。その後通産省の研究所に指導を仰ぎ国内初のオールICコンピューターの製造に成功、オフィスコンピューターの草分けの会社となりました。現在は当社から離れましたが、今のPFUの元になった会社です。
さて本日は初めて能登町に参りました。こんな素晴らしいオーケストラチームがあることを知り、大変嬉しい思いです。東京や大阪に70歳近い方と中学生が一緒にやっている楽団は聞いたことがありません。素晴らしい指揮をなされた地元の指導者、そこにビートの効いた「天地人」がコラボして、まるで何日も何日も練習したかのように、この1日、2日の中でビシッと合わせられた。このような風土と文化を能登の長い歴史が育まれました。
本日は第一回目。明後日は七尾市、3月は珠洲市、5月は輪島市、9月には總持寺祖院がある輪島市門前町となります。それから8月には大阪・関西万博での開催も予定されております。
関係者が一緒になられて能登の地元に根付く音楽と文化を盛上げ、復興への力に繋げていく、そのような皆様の活動にお手伝いができればと思っております。今日お集りの皆様もよろしければこれからの各地の行事にご参加ください。

本日は本当に素晴らしい演奏と皆様の応援、まことにありがとうございました。

共に生きる

天地人 Soul&Beat　TEN-CHI-JIN は元オフコースのドラマー JIRO OMA と津軽三味線の鬼才 HIRO KUROSAWA のコンビで 2003 年に結成された。JIRO OMA が熱中小学校の教諭を務めている関係で能登復興音楽ツアーをお願いした。
HIRO 自身も東日本大震災の被害を受けており、天地人は 2011 年以来東北での復興支援活動を行って来た。能登の各地ではそれぞれの土地独自の音楽や文化活動の若い担い手と共演を行った。
「天地人」との共演に触発されて練習に励むこと自体が復興の一面を持つ活動になった。能登町、珠洲市、七尾市の演奏者とは大阪・関西万博での演奏会を行う事が出来た。これもクラウドファンディングの支援者、株式会社内田洋行の協賛のおかげと深く感謝申し上げます。大間ジロー氏、黒澤博幸氏、制作プロデューサーの山口大祐氏に感想を伺った。

soul&beat TEN-CHI-JIN
天地人／Drums&Perc. JIRO
大間ジロー
「共に奏でる」


JIRO OMA

2025年9月21日、のと復興音楽ツアー「のと・おん」ファイナルは輪島市門前町、門前高校体育館で行われた。
この日、3月の珠洲市で出会った、すず吹奏楽団のサックスプレイヤー油谷知加子さんをゲストに招き、私たち天地人の楽曲を共に演奏した。
その曲間のトークで彼女は次のように想いを観客に向けて話してくれた。

「震災があってから、たくさんの芸能人や音楽家たちが来てくれて、被災した人たちのために色んな演奏を聴かせてくださいました。それ自体はとてもありがたいことです。
でも一方で、私たちもプレイヤーなんです。音楽を奏でたいんです。
能登の子どもたちは、学校が避難所になり、金沢などに集団避難しました。その時、楽器は持っていけなかった。演奏したくても、できない環境になってしまった。
本当は演奏したくて堪らなかったはずです。
そんな時に、『地元の人たちと一緒に奏でる』というコンセプトの『のと・おん』がやってきたんです。
私たちが待っていたのは、まさにこれでした。プロのミュージシャンと一緒にステージに立てることが決まり、子どもたちももちろん、大人たちもみんな必死になって練習しました。みんなの目つきが変わりました。
地元でのステージも、関西万博でのステージも、本当に貴重な経験をさせていただき、本当に楽しかったです」

熱中小学校丸森復興分校～伊藤航事務局長のFacebookより引用。

石川県能登町から始まった熱中学園主催のと復興音楽ツアーは七尾市、珠洲市、輪島市、関西万博、輪島市門前町とそれぞれ地元の音楽家たちとコラボをしながら熱いステージをやり切った。
そのラストの門前の舞台での彼女のスピーチに私は心を打たれた。
晴れやかな笑顔でHIROと背中合わせになり、ソロを吹く彼女の姿を見て胸に込み上げる感情を必死になって抑えたのだった。

そう、これがすべてだった。

『のと・おん』を天地人としてやらせていただき本当によかった、と思える瞬間でした。
最後に、主催の(一社)熱中学園様、後援の石川県、各自治体と教育委員会様、協賛の(株)内田洋行様に心より感謝いたします。

のと・おん
ふり返り
YouTube
動画
約25分

のと・おん
ふり返り
YouTube
動画
約110分


能登町




輪島市




七尾市


輪島市門前町

soul&beat TEN-CHI-JIN
天地人／Shamisen HIRO
黒澤博幸
「復興のキーワードは人」


HIRO KUROSAWA

能登での「のと復興音楽ツアー」は能登町、七尾市、珠洲市、輪島市、輪島市門前町を廻せていただき、各地で地元の太鼓団体であったり吹奏楽団であったり沢山の方々と共演させていただきました。
ジャンルは違えど皆さんの当たり前の日常生活がままならない不便な状況でも賛同していただき、ステージにあがるとそんな苦しさ悲しさを抑え、今のこの一瞬の演奏に全力で打ち込んでいくという姿にとても感動しながら一緒に演奏させていただきました。
また、その流れから共演した皆さんと「大阪・関西万博」へ行き会場の皆さんに「能登は負けない！」という能登の底力を伝えました。
観客の皆さんには、「これだけ頑張っている能登にエールを送ろう！そして共に生きよう！」との想いを、それぞれがそれぞれの立場で伝えられたのではないかと思っています。
そんな様々な場所での演奏で忘れられないのは七尾市で会場に観に来てくれた老夫婦でした。
奥様が車椅子で、旦那さんと息子さんがその車椅子をゆっくり動かしていました。あの日は雪が辺り一面に積り晴天でしたが風がありとても寒い日でした。

私たち"Ten-Chi-Jin"と和太鼓とのコラボライブ…。
正直どこまで音楽を理解していただけたのか、少しでもその時間は日常を忘れて楽しめたのか…。
やがて終演になり、その家族と廊下でお会いしました。おばあちゃんはずっと泣いていました。
握手を求められ手を出すと、ギュッと握りしめなかなか離してもらえませんでした。それを見ていた旦那さんと息子さんは微笑んでいました。

「楽しかった」…。

その一言に色んな思いと感情が込められていたのだと思います。
『おばあちゃん大丈夫だよ。七尾も大丈夫だよ。風邪ひかないでね〜』。気の利いた言葉も見つからず涙も出てくるし、こんな言葉しか出てきませんでした。

東日本大震災…。
あれだけ全てを失った町は時間はかかりましたが、今は素敵な素晴らしい町に生まれ変わってます。
きっと能登も素晴らしい景色に生まれ変わると思ってます。
建物を建てること、橋を架けることだけが復興ではないと思ってます。
その全てを動かす人、マンパワーが必要です。
人が復興していかないと動くものも動かないし回るものも回りません。
そんな復興のキーワードはやはり「人」なのでしょうか。
私たちは建物も橋も架けられませんが人の復興に微力ながら携わらせていただけたのかなと思っています。
心の復興が早期復興に繋がる場合もあると思ってます。体の傷は時間が経てば治ります。
心の傷は一生治りません。
そんな、みなさんと「共に生きる」ことでカバーできるものと思っています。
一緒に共に生きましょう！

(株)ジェイ・ユー取締役
天地人／制作プロデューサー
山口大祐
「共に生きる」

富山県高岡市の瑞龍寺にて開催された、能登半島地震の復興を祈るコンサート（2024年6月）をきっかけに"noto on "がスタートし、第一回開催を決めた能登町に打合せに訪れたのが2024年の9月8日でした。
ご一緒する予定の「ウインドオーケストラのと」の練習風景を見た時に、そこには既に「共に生きる」があったのです。
大人から子供までが共に音楽を奏で、一緒にひとつの作品を創りあげる事を実践していました。この日常を取戻す事がとても大事だと感じ、"noto on" のステージに、「共に生きる」を掲げることにしました。
その後の豪雨災害により、第一回のスタートは翌年2月に延期になりましたが、実現できたのは熱中学園さんのお力と、能登町の皆さんの熱意があったからだと思います。

"noto on" 開催の、どの地区に行っても、能登町同様に大人から子供までが一緒に活動する日常がそこにあり、それを取戻す努力を皆さんがされていました。
"TEN-CHI-JIN" の音魂と、能登の人々との共演は、どの回も感動と共感があり、子供たちの心に残る出来事になったと感じています。



大阪・関西万博


大阪・関西万博


珠洲市

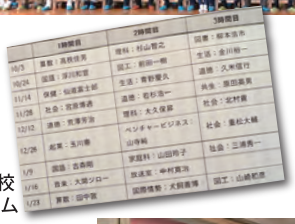
Machu Elementary School

from 2011

あゆみ

2011	3	東日本大震災
	6	オフィス・コロボックル設立(東京赤坂)
2013	4	オフィス・コロボックル @ 会津開設
2014	12	齋藤、佐藤、堀田が豪雪の中旧時沢小学校を訪問
		廃校再生プロジェクト始動 (山形県高畠町)
2015	9	NPO 法人はじまりの学校設立
	10	**高畠熱中小学校開校 (第 1 期生 84 名)**
2016	3	内閣府「地方創生加速化交付金」の対象に選定
	8	**會津熱中塾開校**
	9	**高岡熱中寺子屋開校**
	10	「グッドデザイン賞」(地域・コミュニティづくりカテゴリー) 受賞
		八丈島熱中小学校開校
2017	4	**十勝さらべつ熱中小学校開校(現とかち熱中小学校)**
		とくしま上板熱中小学校開校
		宮崎こばやし熱中小学校開校
	7	**熱中小学校東京分校開校**
	11	「ひがしんビジネスフェア」に初参加・出店
2018	2	書籍「地方創生 熱中小学校の果てしなき挑戦」発刊　著者 滝田誠一郎
	4	**信州たかもり熱中小学校開校**
		紀州くちくまの熱中小学校開校
		越知ぜよ！熱中塾開校(後のこうち仁淀ブルー熱中塾)
	9	**とっとり琴浦熱中小学校開校**
	11	まち・ひと・しごと創生会議にて
		安倍総理他関係閣僚に「熱中小学校」を紹介
		高畠熱中小学校が第一回未来かがやくやまがた景観賞　山形県知事賞を受賞
2019	2	**シアトル熱中小学校開校**
	3	一般社団法人熱中学園設立
	7	シアトルジャパンフェアに初参加・出店
	10	**熱中小学校 萩明倫館開校**
		宮城県丸森町台風被災への支援活動開始
	11	第 7 回 プラチナ大賞 優秀賞「きらり構想賞」受賞
2020	4	**熱中小学校江丹別分校開校(後に白老分校に統合)**
	5	内閣府「関係人口創出・拡大のための中間支援
		モデル事業」に採択
		セカンドキャリアへの取り組み(ふるさとみつけ塾)
		企業版ふるさと納税連携活用開始

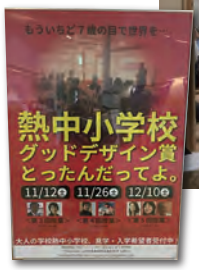




高畠熱中小学校
1 期のカリキュラム









まち・ひと・しごと
創生会議





シアトルジャパンフェアに参加

to 2026

2020	6	**熱中小学校丸森復興分校開校**
	7	熊本県人吉、球磨地域水害被災への支援活動開始
	8	熱中小学校応援歌「Lifelong Learners」リリース
	10	**ちば銚子熱中小学校開校**
		コロナ環境下、全校でハイブリッド授業を導入
2021	4	**きもつき熱中小学校開校**
	6	内閣府「関係人口モデル事業（委託タイプ）」に採択
		（広域化・DX 化の取り組み）
	9	9/11 北海道から 12/12 沖縄まで 3,000 キロの人力車ランを、
		「熱中 KAKAWARI 人力車プロジェクト「」として支援
	10	**ひとよしくま熱中小学校開校**
	10	**おきなわ熱中小学校開校**
2022	4	**熱中小学校白老分校開校（2023/4 江丹別分校と統合 ）**
		和歌山県すさみ町「デジタル田園都市構想補助金を
		用いた事業」採択
	9	高畠熱中小学校７周年記念式典
	10	**紀州かつらぎ熱中小学校開校**
2023	4	**わかやま熱中小学校開校**
	6	内閣府「関係人口創出・拡大のための対流
		促進事業」に採択（食の熱中プロジェクト開始）
	9	**食の熱中小学校開校**
	10	高岡熱中寺子屋７周年記念式典
2024	4	とかち熱中小学校７周年記念式典
	9	能登半島支援プログラム開始
		「noto・on」ツアー実施・「のと熱中授業」の開催開始
	10	宮崎こばやし熱中小学校７周年記念式典
2025	5	紀州くちくまの熱中小学校７周年記念式典
	8	ジャパンタイムズ主催「Sustainable Japan Award 2025」
		で Satoyama 部門審査員特別賞を受賞
	8	大阪・関西万博にて「noto・on」を実施
	9	Sustainable Japan Award 2025 受賞記念講演会（東京）
		シアトル熱中小学校７週年記念
		「食の熱中小学校」ツアー実施
	10	高畠熱中小学校 10 周年記念式典
	11	とっとり琴浦熱中小学校７周年記念式典
2026	4	**みやぎ美里熱中小学校開校予定**



熊本県人吉、球磨地域水害被災への支援活動



「Lifelong Learners」
プロデュース　大間 ジロー
作詞作曲　まき りか
ドラムス　大間 ジロー
ボーカル　山田 直記

熱中 KAKAWARI
人力車プロジェクト
▼那覇のゴール




高畠熱中小学校７周年記念講演
山崎史郎先生


夏恒例の阿波踊り

Sustainable
Japan
Award
2025



受賞記念講演会




noto・on 大阪・関西万博会場にて

あゆみ

熱中先生と熱中小学校のご縁

高畠熱中小学校事務局長　長谷川 智之

高畠熱中小学校の会場となっている場所は元々時沢小学校という校舎でした。熱中小学校という名前は時沢小学校がテレビドラマ「熱中時代」のロケの地となった事に由来します。
1981年2月の放映されたドラマは　「雪国の熱中先生」というタイトルで雪国に転校してしまった生徒の様子を水谷豊さんが演じる北野広大先生が見に行くという内容でした。当時のロケには地元住民の3倍くらいの野次馬が集まったそうです。
2010年３月時沢小学校が閉校になるという事で閉校記念式典が執り行われました。事前に保護者など有志の方で水谷豊さんに小学校閉校についてのお手紙を送り、そのかいあって閉校記念式典にビデオメッセージをいただき、当時の卒業生 14 名 の名前を読み上げと、水谷さんの歌まで披露していただいたそうです。
こうした物語を踏まえて2025年10月高畠熱中小学校の10周年記念事業に際して事務局や生徒有志、近隣の方にも協力いただきお手紙をお送りしました。結果として今回も水谷豊さんからビデオでお返事をいただき10周年の節目に花を添えていただきました。こうした想像も出来なかった未知の繋がりや感動が生まれくる事、熱中小学校の一番熱い所を感じられるお話になりました。
10年間で沢山の出会いと別れ、連携とすれ違いを感じてきました。色んな想いが確かにあってそれでも物語が続いていく事、熱中する教室を通じて新しい社会の在り方を垣間見ています。



水谷 豊さんロケ時の集合写真



10 月 12 日ビデオレターでの水谷 豊さん

編集後記

高畠の10周年記念式典が終わったか終わらないかくらいの時期に堀田さんの方から、10周年記念冊子を作ろうという話がありました。実際に着手し始めたのが11月頭頃なので、実物が出来るのは年度内くらいかなぁと構えていたら、いつの間にか12月中にはみんなの手元に届けるという話になっていました。改めて熱中イズムというか堀田さんのスピード感に触れる機会となりました(笑）。ただ10年という節目で各校の取り組みをまとめて整理する重要な冊子であることは確かなので、これからの各校の発展や新規開校する際の礎となれば幸いです。長谷川

「元気か？ところで出身はどこだっけ？」「東京です」「ご両親は？」「千葉と岩手です」「いいね！来週、遠野に行かない？」「いいですよ」―― 2017 年の秋、堀田さんからの唐突な電話から私もこの「熱」に巻き込まれました。
年表を作るために昔の資料や最近のデータを漁るうち、私はこのプロジェクトのすごさを改めて二点で実感しました。ひとつは一貫して「７歳の目…」をはじめとするコンセプトとデザインを守り続けていること、もう一つは継続的に新たな挑戦を重ね、成果を残してきたことです。これからもこの熱量にワクワクしていたいです。亀田

表紙の30コの球面。各校のバナーのデザインを貼り付けました。もうすでに閉校した学校もありますが、どれがどの学校かおわかりになりますか？平面的だったり、影が強かったり、各校の開校時に作ったので、並べるとばらつきます。あえて作り直しをせず、時の流れ…熱中10年のアルアル、と思っていただけたらと思います(笑)。熱中のタグライン「もういちど7歳の目で世界を…」の竹村譲先生に、この記念誌のタイトルに使ったタグワード「未来を自分色に…」を考えていただきました。これからの10年をどんな色にしていくか。それはあなた次第…タイトル文字の「白」にはそんな意味が含まれています。タナカユウコ

改めまして、熱中小学校プロジェクトへのご理解ご協力をいただいている先生のみなさま、本冊子の作成にあたってご協力いただいた全国関係者のみなさま、この場を借りて御礼申し上げます。



NECCHU
熱中小学校

もういちど7歳の目で世界を…
未来を自分色に…
熱中小学校10周年記念誌

発行日　2025/12/22
発行　一般社団法人熱中学園
編集責任者　堀田 一芙
編集　長谷川 智之・亀田 俊・加藤 泰子
タイトル　竹村 譲
誌面デザイン　田中 裕子
挿絵　古山 拓（p01雪の旧時沢小学校、表3 葡萄）
お問い合わせ　熱中学園 Email: info.necchu@gmail.com
熱中学園・URL　https://necchu-shogakkou.com/

定価　700円

※無断での転写・転載はお断りします。

熱中小学校
5つの流儀

一番目に大事なことは、楽しいこと
二番目に大事なことは、多様性のある人がいること
三番目に大事なことは、刺激と感動があること
四番目に大事なことは、輪の広がりがあること
五番目に大事なことは、そこに貴方がいること